



澪電

2005. 4 No. 26



全 景



国寶大阪全図

大阪大学中之島センター

目 次

会長ごあいさつ（大西 良一）	1	会員の方々のご活躍	20
話 題	2	教室情報	21
講演会からの話題	5	卒業者・修了者氏名（就職先／進路）	23
母校のニュース	7	澪電会役員	25
研究室紹介	11	同窓会だより	27
退官された先生方の近況	14	澪電会だより	29
卒業生の近況	15	クラス委員	36
学生の声	18	澪電会会則	38

大阪大学工学部電気系同窓会

澪 電 会

ホームページ : <http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

平成17年4月

平成17年度大阪大学濁電会総会・懇親会ご案内

濁電会会长 大西 良一

拝啓

陽春の候 会員の皆様にはますます健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、平成17年度濁電会総会ならびに懇親会を下記の通り開催いたします。昨年は160名余の卒業生や先生方が出席され、大盛況でした。母校の先生方を交えて、先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ、情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画されるのもよろしいかと存じます。

昨年同様、本年も講演会を企画いたしました。最新の話題についてご講演いただく予定ですので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

敬具

記

日 時：平成17年6月3日（金）17：30～21：00

会 場：大阪大学中之島センター（大阪市北区中之島4-3-53、Phone：06-6444-2100）

次 第：1. 講演会 17：30～18：15 会場 講義室2,3

「工学から見た『動物の運動機構と制御』および医工連携」

大阪大学情報科学研究科 バイオ情報工学専攻 教授 赤澤堅造 先生

2. 総会 18：15～18：45 会場 講義室2,3

3. 懇親会 19：00～21：00 会場 佐治敬三メモリアルホール

会 費：学部卒業平成8年以降の方 7,000円

学部卒業平成7年以前の方 10,000円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎いたします。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のはがきにて、来る5月20日（金）までにお知らせください。

表紙について

表表紙の“濁電”は、熊谷信昭大阪大学元総長（通信・昭和28年旧制）の揮毫によるものです。写真は、2004年4月27日に竣工記念式典を挙行し、5月1日から本格的な活動を展開しています大阪大学中之島センターです。中之島センターは大阪大学が行う産学連携や知的情報の発信と交流の新しい拠点となることが期待され、

「平成の適塾・懐徳堂」のスタートであると位置づけられています。特別会議室には「国寶大阪全図」の陶板が壁一面にかかっています（写真）。この陶板は大阪大学元総長の熊谷信昭先生にご寄付頂いたものであり、かつての大坂、中之島界隈が見事な絵図として描かれています。

会長ごあいさつ



濬電会会長 大西 良一
(通学・昭32)

8千人の俊秀の集う、この「濬電会」の会長を仰せつかって、はや8ヶ月になります。濬電会の内部のことには全く不案内であった私ですが、大過なく何とか、諸活動をこなして来ることが出来ました。これもひとえに、お忙しい中、一途にご支援いただいた役員、事務局をはじめ会員の皆さんのおかげと感謝いたしております。

昨年を振り返りますと、残念ながら、明るいニュースに乏しい年だったと思います。天災は別として、我が日本を取り巻く国際環境にしても、国内の生活環境を見ても、日本国民ひいては人類の将来に平穏な兆しが見えにくくなつたと感じられます。戦後半世紀続ってきた我が国の発展を支えた、経済、人口、民意などにみる国力が、下り坂にさしかかっているようにさえ思えます。

身近な電機業界でも、最近の「大手電機10社の平成16年度第3四半期実績」では、大騒ぎした「デジタル家電」の低迷ぶりが明らかになって来ています。これもデフレ下における数量景気と性急な各種の経済格差とが表面化しただけのことで、大勢から見れば、いまさらとやかく言うことでもありません。

未だかつて経験したことのない道は、研究、教育の場でも問題を投げかけています。大阪大学も独立法人として、新しい地歩を踏み出しています。今まで経験しなかった性急な変化が立ちはだかる、このような時期にこそ、国内有数の知能集団である「濬電会」も結束し、情報交換を密にし、資源に乏しい日本の再起に向けて、努力することが期待されていると思います。

思い返すと、昨年の6月に催された「本部総会、懇親会」は、例年通り、熱い集いになりました。髪の毛が多少白くなった懐かしい顔や、目新しいさわやかな若い顔があちこちに溢れ、昔話や近況に相槌を打つ、にぎやかな人だまりが揺れ動いていました。これが、長い時間や大きな空間を縮める絆であり、昨今の地域、

業界、企業、職種などにはびこる各種の格差を埋める基なのだと実感いたしました。今年は場所も新たに「大阪大学中之島センター」で開催する企画がなされております。一層の盛り上がりが期待されるところです。「濬電会」はこのほかにも、「卒業祝賀、謝恩会」「各支部総会」「見学会」「ゴルフ懇親会」「会報、濬電」「名簿の発行」「ホームページによる広報」など広い活動を行っています。しかしながら「濬電会」を、時代に即したより強力な組織に展開して行くことを思うとき、さまざまな課題が思い浮かびます。その中で、まず手をつけるべきこととして次の二つに着目してみました。

- (1) 会員がより魅力を感じる内容に、活動を変革すること
- (2) タイムリーな会員の情報交換と広報のネットを構築すること

すなわち、それぞれの行事に当たっては、今までの形にとらわれない、会員諸氏の参画意識をそそる方策と内容を前提とした、見直しが待たれているように思います。それは各自にとって、明るく楽しいこと、新しい発見があること、自分の存在意識を自覚できるものであると考えます。

さらに行事の内容に魅力ある企画が調べられたとしても、的確な時期に、的確な手段で、関係のある向きに広報されることが必須の条件になります。具体的には、クラス、企業の代表役員の選出法を見直し、現状の郵送に加えホームページ、e-mailの活用などで、現実に即した広報手段を整備することです。

もちろん、意図したからと言って、すぐさま形になって現れるものではありません。しかし小さいことでも現状に即した進化を求める集団には、明るい夢があります。みなさんのご提案、ご支援、ご参画を心からお待ちいたしております。

話題

大阪大学の国立大学法人化について

大阪大学 総長
宮原秀夫
(通信・昭42・M44・D48)



濬電会会員の皆様には平素よりご支援賜り、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

皆様ご承知のとおり、大阪大学は昨年4月より国立大学法人大阪大学として、新たな一步を踏み出しました。そこで、この法人化後一年余りを振り返って見たいと思います。

私は、当初からこの国立大学法人化を迎えるに当たり、これを契機と捉え、あらゆる点で改革を推進するが、それと同時に出来るだけスムーズな離陸をするという方針を打ち出しました。

この点に関しては、どうにか実現出来たのではないかと思っています。これもひとえに、大阪大学構成員の皆様方をはじめ関係各位の絶大なるご支援の賜物であり、あらためて感謝申し上げます。

さて、法人化後の大学の運営形態は大きく変わりました。まず大学の最高議決機関はこれまでの評議会ではなく、総長及び理事から成る役員会が重要事項を審議し最終決定を行うことになり、大学の経営面に関しては、その重要事項を審議する経営協議会が設置され、その委員は半数以上の方を外部から選ぶこととなっていきます。

このように形態が変わり、法人化によって学長のリーダーシップをもって大学を運営するという、トップダウン的な手法が示唆されていますが、そのことが直ちに現在の大学運営に有効になるとは思えません。今後とも、役員会においては採決を前提とした事項決定を行うのではなく、全員一致の原則を維持しつつ迅速に事を進めるところにこそ、総長としてのリーダーシップを發揮したいと考えており、役員相互の意志疎通を図るべく、懇談会を適宜開催しています。

また、大学の研究面では効率化が重視され、短期的

な成果が得られやすい応用研究に比重が置かれ、一見すれば無駄とも思えるような基礎研究が軽視されると思われるむきもあるかも知れませんが、この点について私は常々「大学とは壮大な無駄をするところである」と申し上げており、大学しか出来ない基礎研究が存在することは厳然たる事実です。そのような基礎研究が積極的に推進できる環境を整えていくことも重要な使命と考えています。

ところで、法人化後、まだまだ目に見えるような大きな変化が見られないという声があることも承知しております。そこで法人化後に着手した組織、制度改革などの幾つかをご紹介したいと思います。

まずは、人事制度に関して大きな改革が行われました。教員に対しては従来の勤務時間管理体制から裁量労働制の導入を行い、今まで以上に教育・研究活動を通して社会貢献を取り組めるように、また年俸制を導入することで、海外を含め優れた研究者を招聘することが可能となりました。

事務面については、決裁の省略化や手続きの簡素化および書類の簡略化など日常業務の見直しと点検を行い、それを実行に移しているところです。

最後に、大学の根幹をなす教育面においては教養・国際性・デザイン力の三つをキーワードに社会が真に求める人材の育成を企図しています。この点に関連して、今年の4月からコミュニケーションデザイン・センターを設置し、社会との橋渡しができる専門家の養成を行っていきます。

海外との交流ではアメリカ合衆国およびオランダに拠点となるオフィスを設置し、留学生の受入れとともに、本学学生の海外派遣や情報収集の窓口として有効に機能するよう期待しているところです。

また、大阪外国語大学との統合ですが、単に1プラス1が2という構図ではなく、それ以上に学生、受験生から魅力あるものになるよう現在、ワーキングを立ち上げて作業を進めているところです

以上、法人化後の主な改革点及び大学の動向について述べましたが、これ以外にも進行中、さらにこれから着手すべきものが山積しています。今後とも更なる改革を推進していく意気概を皆様と共有していきたいと思います。

話題

大阪大学中之島センターの誕生によせて (大阪大学中之島センター開所式 祝辞)

大阪大学中之島センター
設立募金委員会委員長
名誉教授
熊 谷 信 昭
(通信・昭28 旧)



今から22年前の昭和57年初夏の頃、当時の山村雄一総長から「阪大会館建設構想委員会」というものを設置することになったので、その委員長をつとめてもらいたいというご下命を受けた。時あたかも中之島地区に残っていた本部、医学部、同附属病院等の吹田地区への全面移転が事実上確定した頃のことであった。

この委員会は、大阪大学創立50周年記念事業の一つとして「阪大会館」を建設することが企画されたことを受け、その基本構想について検討を行うために昭和57年6月に設けられたもので、委員は、私の他に医学部の中馬一郎教授、経済学部の小泉進教授、薬学部の近藤雅臣教授と、本部事務局の水村博明事務局長の計5人で構成されていた。

私は早速、夏の暑い盛りに、事務局の人達と大阪駅前の第1ビル、第2ビル、第3ビル等を歩き廻って適当な空き部屋がないか見て回ったり、札幌まで行って北大クラーク会館の運営方式などを調べたりもした。

委員会は月1回程度の頻度で開催し、活発な、しかし楽しい議論を重ね、約半年後の昭和58年1月に検討の結果を総長に報告した。この検討結果は部局長会議などでも報告されたが、これが、現在の「大阪中之島センター」の建設に関する最初の具体的な調査・検討の始まりで、中之島センター誕生のそもそもの原点となつものであった。

私が提出した報告では、阪大会館は、大阪市の中心部で、大阪大学発祥の地でもある中之島の阪大移転跡地に「自前の建物」として建設すべきであるということや、建物・施設はアカデミックな雰囲気をもち、重厚にしてかつ華麗な、欧米の著名な一流大学の類似の会館等とくらべても決して見劣りのしない、出来る

だけ立派なものとすべきであるということ、宿泊(ホテル)機能は維持・管理の点などから設けないこととすること、などを提言し、実に壮大な基本構想を提案していた。

この「阪大会館建設構想委員会」は、その後、山村総長の後を受けた私の総長在任中の昭和62年に、名称を「阪大会館建設実行委員会」と改め、さらに平成3年には「中之島センター(仮称)建設委員会」として引き継がれた。これらの委員会は、私の後、近藤雅臣教授が第2代の委員長となり、その後、松岡博、本間正明、城野正弘の各教授が順次委員長をつとめた。

金森総長時代を経て、岸本総長時代の平成12年には(財)大阪大学後援会の中に「大阪大学中之島センター設立募金委員会」が設けられ、私がその委員長を拝命し、各学部の同窓会会长や卒業生の皆様、企業・財界・経済団体等のご代表をはじめ、大勢の方々の暖かいご支援とご協力のもとに活発な募金活動が進められた。同時に、並行して、平成12年2月には「中之島センター構想検討ワーキング」が設置され、平成13年12月には「ワーキング小委員会」が、さらに平成14年11月には「使用検討小委員会」などが設けられ、施設設計の基本方針や使用計画などの具体的な検討が進められて、遂にこのたび、その実現をみるにいたった次第である。

私共の長年にわたる念願であったこの「大阪大学中之島センター」が目出度く開所式を迎えることになったのは大勢の方々の非常なご努力のお蔭であるが、最初の段階からこの計画にかかわってきた者の一人として、私個人にとっても実に感無量のものがある。

大阪大学中之島センターの実現については、大勢の方々の大変なご尽力をいただいたことに加えて、忘れてはならないいくつかの幸運に恵まれたこともこの機会に記憶に止めておきたいと思う。

第一に、そもそも阪大の中之島移転跡地については、「阪大が移転した後の跡地はすべて国の処分財源とする」ということが当時の文部省・大蔵省と大阪大学との間で約束されており、「阪大は中之島の移転跡地には何の施設も持たない」ということが吹田への移転の条件となっていたのである。従って、すべて処分財源とすることが決まっていた国有財源である中之島の移転跡地に、阪大が土地の割譲を受け、阪大の施設を設けることができるようになったことについては、国(旧文部省・大蔵省)のご理解と、地元大阪市等の暖

かいご支援があったお蔭であることを忘れてはならない。

第二に特記すべき幸運は、この「大阪大学中之島センター」が文部科学省の「キャンパス イノベーションセンター」と一体として建設されたことである。「キャンパス イノベーションセンター」は計画当初は「ナショナル イノベーションセンター（仮称）」とよばれていたもので、当時の小野文部事務次官が国公私立大学が共同で利用することのできる学外施設として関東と関西にそれぞれ一ヶ所づつ設けることを企画され、関西では中之島に「大阪大学中之島センター」と一体として合築することとされたものである。そのお蔭で、建物全体としては当初の予定の約2倍の大きさの立派なものとなったわけで、これも、非常に大きな幸運であったといわなければならない。

改めて考えてみても、阪大会館（大阪大学中之島センター）を建設する場所として、この中之島に勝る適地は他には考えられない。実際、川をはさんですぐ北側の附属病院跡地には、大阪大学の源流である適塾で学んだ福沢諭吉生誕の地として記念碑が設置されているし、すぐ南側にあった理学部の中には、開学当初から長い間、大学本部がおかれており、初代総長の長岡半太郎先生などもここにおられたのである。

また、本センターの位置には医学部があったが、少なくとも私が阪大を卒業した昭和28年頃までは、その医学部の3階の講堂で全学（当時は医、理、工の3学部）の卒業式も行われていた。その後は、理学部のすぐ南隣に松下幸之助さんの寄贈によって建てられた大学本部棟と一体の阪大講堂（通称松下講堂）で入学式や卒業式をはじめ大学の公開講座など諸々の主要な行事が行われていたが、この阪大講堂（松下講堂）も、平成3年の夏に、私の総長の任期満了に伴い次期総長として金森順次郎総長を選出した総長選挙が行われたのを最後の使い納めとして姿を消した。

いずれにしても、大阪大学の第3のキャンパスとして、大阪大学が永い歴史を刻んできたこの中之島地区に勝る適地は他ではなく、ここに「大阪大学中之島センター」を作ることができたことは何にも勝る幸せであったということができよう。

私は現在、大阪府と大阪市のそれぞれの総合計画審議会の会長や「阪大病院跡地利用懇談会」の座長などをつとめている関係から、この周辺の将来計画についてもかなり詳しく承知しているつもりであるが、本センターの南側には、ご承知のように、すでに「大阪市立科学館」があり、隣接する「国立国際美術館」も間もなくオープンすることになっている。そして、それ

らと本センターとの間には「大阪市立近代美術館」の建設が計画されており、また本センターの西側には「舞台芸術総合センター」の建設構想がある。さらに、本センターのすぐ東隣は、かつての広島藩大坂蔵屋敷の跡地で、平成8年には大阪市によって発掘調査が行われ、堂島川から蔵屋敷内に水を引き入れた船着場（船入）の石垣などが当時の姿のまま良好な状態で残っていることも確認されている。現在は保存のために石で埋められているが、近い将来、石を取り除いて掘り起こし、大阪の歴史的な「船入」の遺跡とする計画であると聞いている。そして、センター周辺のその他のスペースは広場として整備し、大阪の学術・文化と芸術の中心的なゾーンとする計画になっている。

川をはさんですぐ対岸の附属病院跡地の東側約1／3にはすでに法務省の総合庁舎が、私共の「阪大病院跡地利用懇談会」からの強い要請をよくご理解いただいて、周辺の景観にも十分配慮された、役所らしくない建物として建てられており、西側1／3には朝日放送が全面移転してくることになっている。そして、その間の残り1／3の中央部分には多目的のコンサートホールなどを含む文化集客施設や水辺にぎわいの街が出来るはずである。さらに、このような姿に生まれ変わる附属病院跡地と本センターとの間の堂島川にはベニスのポンテペッキオの現代版のような歩行者専用のおしゃれな橋を架けて、橋上には憩いのカフェやショップ、ミニミュージアムなどを設ける夢も描かれている。

以上のように、大阪大学にとって最もゆかりの深い場所で、かつ、近い将来、芸術・文化とにぎわいのゾーンになる大阪の中心（ハート オブ オオサカ）に、大阪大学の諸活動の拠点となる中之島センターが誕生したことは何にも勝る大きな喜びである。皆様と共にその発足を心よりお祝いしたいと思う。

講演会からの話題

カーボンナノ材料の作製制御と その応用探索に向けて

大阪大学
大学院工学研究科
電子工学専攻 教授
尾 浦 憲治郎
(電子・昭39・M41・D46)



カーボンナノチューブ (Carbon Nanotube ; CNT) は、ナノテクノロジーを基盤とした次世代のエレクトロニクス、情報通信、エネルギー、バイオ技術を切り開く可能性を大きく秘めた材料である。特に、量子細線としてみたCNTは、1次元物質がもつナノ領域の物性を発現しうる理想的なナノワイヤとして捉えることができる。

CNTのナノデバイス応用の可能性は多岐にわたっているが、実用化のためには、各種応用にあわせて、(a) 形態・構造が制御されたCNTの創製、ならびに(b) CNTと金属・半導体・絶縁体などの無機物質とのハイブリッド化と界面制御が必要不可欠となる。例えば、(1) エレクトロニクス応用としては、金属電極との接触抵抗の低減、自己組織化による高スループット化、マルチシェルによる絶縁膜とのコンポジット化、(2) ディスプレイ応用としては、CNT配列制御による電界電子放出効率の向上、ガラス基板上での低温・大面積合成、(3) エネルギー貯蔵デバイス応用としては金属基板上での長尺・高密度のCNTの作製、(4) ナノプローブ応用としては、CNTと探針本体とのコンタクト制御、電気的・化学的パッシベーションが必要となる。講演では、このようなデバイス応用にあわせたCNT作製制御の試みを紹介するとともに、無機材料-CNTハイブリッドナノ構造の有望な形態のひとつである、CNTに無機材料を被膜したマルチシェル構造の作製技術とその応用例について述べた。

フィールドエミッションディスプレイ (FED) を実用化するには、低電界で大電流が得られる冷電子エミッターの開発が不可欠である。本研究では、CNT束のピラーを電界集中効果が最大となるように最適化して配列させることにより、きわめて低い電界で駆動

する高効率電子エミッターの作製に成功した。エミッション特性は、 $1\text{V}/\mu\text{m}$ の超低閾値電界で $10\text{mA}/\text{cm}^2$ の電子放出を示した。さらに、蛍光板による発光実験から全面に均一なエミッションを確認した。30時間のエミッション電流測定の結果、変動は 5%以内であった。試作した超低閾値電界電子エミッターは、低消費電力FED、高輝度光源などの実現に資するものであり、実用化のためには作製プロセスの低温化が必要であるが、例えば、プラズマCVDを用いれば低温プロセスが可能であり、今後の展開に期待がもたれる。

エネルギー貯蔵デバイスのひとつに電気二重層キャパシタ (Electric Double Layer Capacitor ; EDLC) がある。EDLCの電極には活性炭が使用されてきたが、それに代わる新材料として、実効表面積が大きいCNTが最近注目されている。ここでは、長尺・高密度のCNTを電極としたEDLCを試作した結果を紹介した。金属基板上に作製した長尺・高密度CNT電極を2枚対向させてEDLCを作製し、その充放電特性を評価した。その結果、活性炭電極を用いたEDLCと比較しても非常に安定なサイクル特性を示し、数千サイクル後も性能が低下しないことがわかった。

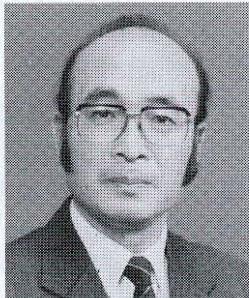
CNTと異種材料層をコンポジット化し、その界面制御をすることは、デバイス応用のうえで必要不可欠である。例えば、単層CNTの電界効果トランジスタ (FET)への応用を念頭に置いた場合、単層CNTはそのカイラリティに依存して半導体または金属の電子構造をとるが、それ自体では原理的に絶縁体にならないことを鑑みると、コンポジット化の重要性が想像できよう。そのコンポジットの形態のひとつとして、CNTに異種材料を被膜したマルチシェル構造がある。種々材料を均一に被膜することで、①ゲート絶縁膜などのCNTへの機能付加、②電気的・化学的パッシベーション、③作製困難な材料のナノワイヤ形成が期待される。そのための要素技術として、パルスレーザー蒸着法 (PLD) により均一な膜厚の無機材料膜が被膜されたCNTを作製する手法を開発した。さらに、ナノレベルの膜厚の金属膜が被膜されたCNT探針を作製し、走査トンネル顕微鏡/分光 (STM/STS)への応用を実現した。このように、CNTへの被膜法は、ナノ電子デバイスのほか、パッシベーションが要求される生化学プローブやセンサーなどへの応用が期待される。

講演会からの話題

21世紀を支える基盤技術

—有機エレクトロニクス
とフォトニック結晶—

大阪大学
大学院工学研究科
電子工学専攻 教授
吉野 勝美
(電気・昭39・M41・D47)



現代社会を支える基盤技術であるエレクトロニクスが半導体の飛躍的な進歩によってもたらされたことは周知のところである。しかしこの流れがそのまま続き更に大きく進展するかどうかは、Si, GaAsなどを始めとする無機半導体材料の資源と製造コスト、材料の製造および素子の動作に要するエネルギー、環境への負荷、超微細加工の限界とそのコスト、超微細素子での原理的な課題などを考えると不透明と云わざるを得ない。

このような状況下、有機物質などこれまでエレクトロニクス材料として余り積極的に見られていないかった材料の活用が大いに期待され始めているが、特に21世紀においてますます重要になる低コストで環境にも調和する材料を獲得する上で、自然から、生体から学ぶところはすこぶる大きなものとなる。また、そこから全く新しい原理、概念のエレクトロニクス、オプトエレクトロニクスが生まれてくる可能性がある。

エレクトロニクスにおいて常識を超えてそれを構成する材料、原理が全く異なるものとなった例を、われわれ自身大学で研究を始めた1960年代一度大きく体験しているのである。われわれが大学で研究を始めた頃においてはエレクトロニクスは真空管を基盤として展開されており、一方現代ほどオプトエレクトロニクスと云う概念は出来上がってはいなかったが、そのひとつとしてのディスプレイはブラウン管を持ってなされていたのである。真空管でも、ブラウン管でもその動作の基盤は真空中のエレクトロン、電子の振る舞いにより築き上げられていたのである。

そんな状況の中、半導体と云う固体結晶の中の電子の振る舞いを理解し制御しエレクトロニクスとして活用しようと云う研究、開発が活発に展開され、気がついてみると現代では半導体抜きでエレクトロニクスが考えられない状況となっている。その中でディスプレイについてもブラウン管ではなく半導体を用いたElエレクトロルミネッセンス、発光ダイオードで実現しようと云う研究が活発に展開された、これはすぐには成功はしなかったが世の中が真空から突然半導体一色となつたのである。従って、半導体に関して陰りが見え

始めた今、何か新しいものが突然現れてもおかしくはないと言ふ状況に入っているのである。それが有機物質の中での電子の振る舞いを解明しそれを有効に使った有機エレクトロニクスなのである。考えてみればわれわれ人間そのものが無機半導体からではなく有機物質からなりながらものすごい能力を發揮しているのであるから、これを積極的にエレクトロニクスに展開することはなんら不思議なことではない。

ところが実際にはこのような有機エレクトロニクスが大きく進展する前駆として液晶ディスプレイの成功がある。これはブラウン管、発光ダイオードなどと全く異なった原理で動いているのである。この大成功があつたからこそ有機物質を用いたエレクトロニクスも産業界からも真剣に検討され始めたのである。

有機エレクトロニクスの基盤は有機物質中での電子の振る舞い、特に二重結合と単結合が繰り返し長くつながった共役系の発達した分子、高分子のπ電子の振る舞いによって成り立っているといえる。実際このπ電子は動きやすく光とも相互作用し様々な可能性を生み出しつつある。例えばこれらをベースとするものとして、電解コンデンサが殆ど従来の電解液を用いたものから導電性高分子を用いたものに変わったことがあげられ、また有機ELも実用化が始まり、更には有機物質を活用した太陽電池も大きく開発が進んでいる。

一方フォトニック結晶もオプトエレクトロニクスに画期的な新しい展開をもたらすものである。

フォトニック結晶は光の波長程度の周期構造を持ったものであり、その中ではあるエネルギー範囲の光の存在と伝播が禁止されると云うフォトニックバンドギャップの概念が存在し、これによって光を閉じ込めたり、ためたり、任意に動かしたり、閾値のきわめて低いレーザーを実現するなど様々なことが可能となる。実はこのフォトニック結晶と関連付けることができるものが自然界に結構多く存在する。例えば、オパール、貝の内面、蝶の羽根、玉虫などである。

フォトニック結晶の実験的研究は半導体微細加工技術として発展してきた高度の装置が使われる場合が多いが、われわれは自然に学んで、自己集積法によるシリカオパールとその反転オパール、更には一次元積層構造などを適用して様々な構造、材料の物質を作りフォトニック結晶としての性質を明らかに、更にチーナブルフォトニック結晶と云う新たな概念を提案し優れた応用が可能となることを明らかにしてきた。

講演ではこれらの有機エレクトロニクスとフォトニック結晶についてわれわれの取り組んできた立場から具体例を挙げてその可能性の高さを易しく詳述し、これらが21世紀の社会を支える基盤技術となることを示した。

母校のニュース

専攻再編について

森田清三代議員

24専攻あった工学研究科の専攻は、平成17年度から統合されて10専攻となる。電気系では、電気工学専攻、通信工学専攻、電子工学専攻、電子情報エネルギー工学専攻の4専攻が統合されて、電気電子情報工学専攻となる。他方、原子力工学専攻は環境工学専攻と統合して環境エネルギー工学専攻となる。また、旧情報システム工学専攻は、ご存知のように、既に、基礎工学研究科や理学研究科と一緒に作った情報科学研究科の情報ネットワーク学専攻、情報システム工学専攻、マルチメディア工学専攻、バイオ情報工学専攻に分かれている。今回は、平成17年度から新たにできる電気電子情報工学専攻について紹介する。

表1は、平成16年度と平成17年度以降の履修コース対照表である。平成17年度にできる電気電子情報工学専攻には、電気電子システム工学部門、情報通信工学部門、量子電子デバイス工学部門の3部門ができる。また、大学院博士前期課程と後期課程の履修コースは、

平成16年度の6コースが平成17年度には4コースに統合される。なお、これらの4コースを基礎とした総合コースが新たにできるので、実質的には5コースとなる。大学院の入試は、従来のペーパーテストだけ的一般入試に加えて、新たに推薦入試を開始する。また、入学試験科目「英語」へのTOEIC、TOEFL導入が決定され、英語はTOEIC又はTOEFLを受験して、公式認定証を提出することになった。

表2は、電気電子情報工学専攻の部門、講座、領域と在籍する教授名を示す。これを見ていただくと判るように、電気電子システム工学部門は、従来の電気工学専攻と電子情報エネルギー工学専攻のシステム関連の4研究室とが構成するシステム・制御工学講座と従来の電子情報エネルギー工学専攻の電磁エネルギー工学コースが構成する先進電磁エネルギー工学講座を持つ。情報通信工学部門は、従来の通信工学専攻と電子情報エネルギー工学専攻の情報通信関連の7研究室から構成される。量子電子デバイス工学部門は、従来の電気工学専攻と電子工学専攻と電子情報エネルギー工学専攻の材料・デバイス・集積関連の10研究室から構成される。また、それに伴い、電気系協力講座の11研究室が3つの部門に表2のように再配置される。

表1 電気電子情報工学専攻の履修コース

平成16年度まで		平成17年度以降	
専攻名	履修コース名	部門名	履修コース名
電子情報エネルギー工学	電磁エネルギー工学	電気電子情報工学専攻	システム・制御・電力工学
	電子情報工学		先進電磁エネルギー工学
電気工学	システム・電力工学	情報通信工学	情報通信工学
	量子電子工学		量子電子デバイス工学
通信工学	通信工学	量子電子デバイス工学	量子電子デバイス工学
電子工学	量子電子工学		
	システム工学		

表2 電気電子情報工学専攻の部門・講座・領域

部門	講座	領域名	教授名
電気電子システム工学部門	システム・制御工学	パワーエレクトロニクス	伊瀬敏史
		インテリジェントコントロール	熊谷貞俊
		パワーシステム	辻毅一郎
		システムアナリシス	谷野哲三
	先進電磁エネルギー工学	高強度レーザー工学	田中和夫
		プラズマ生成制御工学	西川雅弘
		高エネルギー粒子工学	児玉了祐
		先進ビームシステム工学	飯田敏行
	協力講座 レーザーエネルギー学	レーザーエネルギー学研究センター 光・量子材料研究領域	中塚正大
		レーザーエネルギー学研究センター 放射流体プラズマ研究領域	西原功修
		レーザーエネルギー学研究センター 高密度プラズマ物理研究領域	三間闇興
情報通信工学部門	通信ネットワーク工学	ロバストネットワーク工学	滝根哲哉
		フォトニックネットワーク工学	北山研一
		ワイヤレスネットワーク工学	小牧省三
	通信システム工学	メディア統合コミュニケーション工学	馬場口登
		ワイヤレスシステム工学	三瓶政一
	光電波工学	極限光通信工学	井上恭
		環境電磁工学	河崎善一郎
	協力講座 知能システム工学	産研 知能システム科学研究部門 高次推論方式研究分野	元田浩
		産研 知能システム科学研究部門 知識システム研究分野	溝口理一郎
量子電子デバイス工学部門	創製エレクトロニクス材料	機能創製基礎プロセス	伊藤利道
		機能性材料創製	佐々木孝友
		ナノ材料・計測	片山光浩
	エレクトロニクスデバイス	量子電子機能材料デバイス	杉野隆
		分子機能材料デバイス	尾崎雅則
		集積光電子デバイス	栖原敏明
		先進電子デバイス基礎	近藤正彦
	集積エレクトロニクス	集積機能デバイス	谷口研二
		原子分子操作組立	森田清三
		生体システム・デバイス	八木哲也
	協力講座 光・電子材料科学	産研 量子機能科学研究部門 光・電子材料研究分野	朝日一
		先端科学イノベーションセンター	大森裕
		電顕センター・生体立体超構造分野	鷹岡昭夫
		レーザーエネルギー学研究センター テラヘルツフォトニクス研究領域	斗内政吉
	協力講座 極限科学・量子科学	レーザーエネルギー学研究センター 超高強度光学研究領域	宮永憲明
		レーザーエネルギー学研究センター 光・量子放射計測研究領域	西村博明

藤岡 弘教授最終講義

情報科学研究科情報システム工学専攻藤岡 弘先生は、平成17年3月31日をもって定年退職されることとなりました。ご退職を迎えるにあたり、最終講義が平成17年2月10日（木）午後3時より電気系メモリアルホールにて行われました。当日は、学内の学生や先生方のみならず、卒業生等学外からも多数聴講に来られました。情報システム工学専攻長の尾上孝雄教授より藤岡先生のご略歴が紹介された後、「既成概念を超えたところに飛躍あり 一研究生活40年を振り返ってー」と題する講義が始まりました。

先生はまず、大学進学前の出来事として、昭和32年のソビエト連邦が打ち上げに成功したスプートニク1号のアンテナと昭和34年のキルビー特許、ノイス特許による集積回路の発明をご紹介され、人工衛星と集積回路に、特に宇宙空間におけるアンテナ設計に興味を持たれ、通信工学科に進学されたことを述べられました。続いて、研究室配属後の夏休みに実施された工場実習で、人工衛星搭載用アンテナの指向性を解析し、コンピュータでパターンを計算した経験が後の研究で大いに役立ったことを述懐されました。

次いで先生は、第1の既成概念を超えたところに飛躍ありとして、当時未開拓領域であった、従来の静止系の電磁界理論では処理できない工学的諸問題、特に高速飛翔体を含む系の通信に関する研究に取り組まれたことを挙げられました。

次いで、電子ビーム研究施設に就職されてからのストロボ走査電子顕微鏡の開発と電子デバイスへの応用、電子ビームテスティング技術の集積回路診断への応用を紹介されました。この中で、第2の飛躍として、集積回路の基本構造である金属酸化膜半導体（MOS）構造における低エネルギー入射電子の異常侵入現象の発見を述べられました。これを契機に産業界において電子ビーム計測装置の低加速電圧化が進みました。引き続き、第3の飛躍として、ストロボ電子ビーム計測装置において、従来信じられていたビームパルス幅ではなく走行時間効果が時間分解能を制限することを明らかにしたこと、第4の飛躍として電子ビーム計測装置のコンピュータ制御を他に先駆けて手掛けたことを述べられました。これらの成果は実用面でも利用され、電子ビームテスターと呼ばれる商用装置の開発に大きく貢献されています。

次いで、情報システム工学専攻に移られてから行われた、電子ビームテスティング技術の大規模集積回路

診断へのシステム化、集積システム診断のための画像処理技術、大規模集積回路の設計・生産・テストの一連の工程を一つのシステムとしてとらえたシステム評価・診断・最適化に関する先駆的研究を紹介されました。この中で、第5の飛躍として、大規模集積回路のレイアウトデータのみを用いた自動故障追跡法を、第6の飛躍として、経験と勘に頼りがちであった大規模集積回路生産テスト工程へのシミュレーション解析技法の導入を取り上げられました。

最後に、先生は、既成概念（常識）にとらわれるとのない研究姿勢の重要性について力説され、講義を終えられました。また、このような教育および研究の姿勢を持ち続けることを可能にした大阪大学での研究生活に感謝の言葉を述べられました。

次いで、先生の永年のご指導に感謝の意を込めた花束贈呈が研究室の大矢佳恵秘書から行われ、大きな拍手に包まれ、先生はご退席されました。

なお、最終講義の後、別室で藤岡先生を囲んだ茶話会が開かれ、約1時間にわたって懇談が行われました。

（中前幸治（電子・昭52）記）

井澤靖和教授最終講義

寒さも厳しい2月16日、井澤靖和教授の最終講義がレーザーエネルギー学研究センター大ホールで開催された。井澤教授は昭和48年3月工学部附属レーザー工学研究施設助手に着任以来、レーザー同位体分離を中心に、「高出力レーザーとその応用」に関する研究を進められ、関連分野の萌芽期にその礎を築かれた。

辻副センター長による略歴紹介の後、「レーザー同位体分離研究の30年」と題して講義が行われた。レーザーウラン濃縮実験では2段階分離で、35%までの濃



縮を確認されたこと、濃縮プラントにおける光電離基礎課程の研究、金属蒸気中のレーザーの長距離伝搬の研究、レーザープラズマ中の原子核励起の研究などが部外者にも分かりやすく紹介された。

会場の大ホールは150人を収容するも、超満員となり、2箇所の出入り口まで黒山の人だかりができる状態であった。兜秀昭氏（電学昭41）島木亮治氏（電修昭44）吉田國雄氏（電修昭48）藤原閑夫氏（電博昭56）小林弘幸氏（電学昭51）など、学外からの滝電会員の懐かしい顔を拝見することができた。

最後に佐藤春夫の「慎みて努め行なえや、その希望成らぬことはなし」と言う詩を引用され、謙虚な態度で研究に望むよう、後輩にレーザー応用研究に関する熱い思いを託された。

吉野勝美教授最終講義

電子工学専攻教授・吉野勝美先生は、平成17年3月31日をもって定年退職されることになりました。ご退職を迎えるにあたり、最終講義が平成17年2月9日（水）午後3時より銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホールにて行われました。当日は、学内のみならず、卒業生をはじめ学外からも多数聴講に来られました。電子工学専攻長の栖原敏明教授の司会により、「研究者としての半生を振り返って－自然に学び、調和する、夢のある楽しい科学技術－」と題する1時間半の講義が始まりました。

最初に、研究を農業にたとえられ、様々なタイプの研究者がいるなかで、ご自身は「耕す人」あるいは「種をまく人」であると述べられ、これまでの研究者としての半生を振り返る講義がスタートしました。まず序論として、先生が生まれた当時の時代背景や幼少年時代をすごされた島根の様子、さらに高校時代、東野田時代の様子を、懐かしい当時の新聞記事や写真を使って紹介されたのち、本題の有機エレクトロニクスについてこれまでのご研究の紹介に入られました。なかでも、その黎明期より精力的に研究を推進されてきた導電性高分子のお話では、白川英樹博士をはじめとする多くの国内外の研究者との交流を織り交ぜながら、基礎研究から先駆的応用研究についてわかりやすく解説され、導電性高分子研究の「種まき」をされたことを紹介されました。また、フォトニック結晶に関するお話では、特に、自然界にも数多くのナノ構造（フォトニック結晶）があることを紹介されるとともに、ご自身が世界に先駆けて進められてきたオパール

構造のフォトニック結晶の研究を例に、講義のタイトルでもある「自然に学び、調和する、夢のある」研究を語られました。さらに、当時の科学技術振興事業団のプレベンチャー事業による液晶測長器研究の紹介と、その成果として設立された二つのベンチャー会社についてお話をされました。

最後に、これまでの経験から得られた研究者としての教訓について、それぞれわかりやすいたとえを使って説明され、大いに参考になる示唆に富むお話を聞かせていただきました。

結びとして、再び研究者のタイプについて触れられ、ご自身はこれから「楽しむ人」になると述べられ、益々研究者としてご活躍されることを示唆されるとともに、これまでの研究生活にかかわってこられた方々への感謝の言葉を述べられ、450枚に達するスライドを駆使した講義を終わりとされました。

講義終了後、先生の長年のご指導への感謝の意を込めて、研究室の金子千恵子秘書より花束が贈呈され、受講者全員の大きな拍手のもと本日の最終講義を終了しました。なお、講義の後、同じく銀杏会館の別室にて吉野先生を囲んだ懇親会が開かれ、旧知のご友人や卒業生の方々をはじめとして、皆様と和やかな雰囲気で懇談が行われました。

（尾崎雅則（電気・昭58）記）

研究室紹介

電子情報エネルギー工学

科目専攻

エレクトロニクスデバイス講座
量子電子機能材料デバイス領域



教授 杉野 隆
(電気・昭47・M49)

本講座は昭和8年（1933年）大阪帝国大学発足時に設置され、故望月重雄教授が講座を担当され、気体・液体・固体誘電体の絶縁破壊に関する研究を進められた。その後、昭和21年（1946年）から故山口次郎教授が講座を担当され、整流器を中心に半導体研究を始められ、昭和36年（1961年）から講座を担当された故犬石嘉雄教授は半導体の高電界現象、誘電体の高電界伝導と絶縁破壊、クライオエレクトロニクスなどの研究を推進され、昭和62年（1987年）から白藤純嗣教授が講座を担当され、Ⅲ-V族化合物半導体の欠陥パシベーション、シリコン集積回路に用いられる絶縁体薄膜の物性解明、高温酸化物超伝導体結晶育成法に関する研究を進められた。平成15年から杉野隆が講座を担当し現在に至っている。研究室の運営は木村千春学内講師、東沙織事務補佐員の協力を得て進めている。電気系専攻の改組により平成17年から講座名称がエレクトロニクスデバイス講座 量子電子機能材料デバイス領域と改められる。

本講座では今後益々進展していくITに対応できる高性能半導体デバイスを具現化できる材料創製やデバイス作製プロセスに関する要素技術の研究を進めている。また、環境、医療等の分野におけるセンサーをはじめとする新機能デバイスの研究を行う。このため既存材料だけでなく新機能を現わす材料の創製技術の開発および新しいプロセス技術の提案が不可欠となる。最近の主要な研究課題は以下のようである。

（1）新機能材料の創製

① 低誘電率絶縁体薄膜の合成

次世代シリコン集積回路素子（ULSI）の持っている課題の1つに多層配線による信号遅延という問題があり、配線層間絶縁体材料の低誘電率化が不可欠となっている。またⅢ-V族化合物半導体で作製される高速電子デバイスの高性能化においても表面パシベーション膜や配線層間絶縁膜として低誘電率薄膜が必要とされ、従来用いられていたSiO₂（誘電率4）に対して誘電率2以下を有する材料が求められている。このニーズに対応できる新しい材料として窒化ホウ素炭素薄膜を提案し、その合成に関する研究を進めている。

② ワイドバンドギャップ半導体結晶膜の成長

次世代紫外光源やパワー・デバイス用材料として対応できる新規ワイドバンドギャップを有する窒化物半導体膜の結晶成長に関する研究を行っている。

（2）半導体表面制御およびデバイス応用

シリコンに代わる次世代パワーデバイスとしてワイドバンドギャップ半導体によるMISFETが求められている。窒化物半導体や炭化珪素、ダイヤモンドを用いたMIS構造の作製プロセスを検討し、基盤要素技術の開発を試みている。

（3）真空ナノエレクトロニクスの研究

フィールドエミッションディスプレー、材料評価装置などの電子源用材料として従来のシリコンやモリブデンとは異なるカーボンナノチューブやダイヤモンド、窒化物半導体といった材料が注目されている。これらの材料の電子放出機構の解明および電子エミッタの高性能化に関する研究を進めている。

（4）新機能デバイスの研究

新しい窒化物や酸化物材料の電気伝導機構を解明すると共に諸特性を評価し、ガス、イオンをはじめ、種々のセンサーの作製を試みている。

電気電子情報工学専攻
情報通信工学部門
通信システム工学講座
メディア統合
コミュニケーション工学領域



教授 馬場口 登
(通信・昭54・M56)

情報通信技術（ICT: Information and Communications Technology）の進展により、膨大な量のマルチメディア情報が蓄積、高速伝送されるようになってきた。1対多や多対多のコミュニケーション、あるいは人対人や人対機械（コンピュータ、ロボット、エージェント）のコミュニケーションなど多様なコミュニケーション環境が創出されつつあり、旧来の1対1を中心とするコミュニケーション環境を凌駕する枠組が要請されている。とりわけ、コミュニケーションの最終的な受益者は人であるため、人に優しく使いやすくする技術やコミュニケーションを安全かつ円滑にする技術が重要となる。そのためには、人を取り巻く環境においてコミュニケーションを支援する知能化技術、マルチメディア技術、並びにセキュリティ技術をICTと融合させた知能情報通信システムが必要となる。このようなシステムを通して、時間、空間、世代、言語、人種、文化を超えたコミュニケーションが現実のものとなる。

本領域では、上述の知能情報通信システムを実現するため、マルチメディア（画像・映像・音声・言語）処理、メディアセキュリティ、マルチメディア符号化、ディジタル信号処理など、マルチメディアコミュニケーションに関する基盤分野の研究と教育を担当している。平成17年度の工学研究科の改組と共に、領域（研究室）名は標記のような名称に変更された。ちなみにコミュニケーション工学（通信工学ではなく）と表記する理由は人間を含めた情報通信系を扱うこと

を標榜する意味を込めている。情報通信工学部門では、物理レイヤからネットワークレイヤさらには応用レイヤまですべてのレイヤをカバーする編成が取られているが、本領域はもっとも上位のレイヤをカバーしていることになる。

さて、本領域の源流は、昭和15年の通信工学科創設と同時に設置された通信工学第2講座である。通信工学科50周年記念誌によると、創設当初は、青柳建次教授、熊谷三郎教授が担当され、昭和24年から昭和45年まで笠原芳郎教授、昭和47年から平成元年まで中西義郎教授、平成5年から平成13年まで前田肇教授が担当され、平成14年から馬場口が担当している。担当者の変遷と共に、研究テーマも有線工学、システム工学、制御理論、信号システム理論と移り変わり、現在のマルチメディアコミュニケーション工学に至っている。現在のスタッフは、馬場口のほか、伊藤義道 助手、新田直子 助手、濱富士雄 技術専門職員、井上彩 事務補佐員であり、外国人客員研究員、大学院生、学部生とともに研究室を構成している。研究室の指導方針は、先進的な研究を通して世界レベルの研究者・技術者を育成することである。この一環として、修士課程の学生から国際会議への投稿・発表を推奨している。

現在の研究テーマは以下の通りである。

- (1) 映像ハンドリング（セマンティックス解析、要約、編集、クラスタリング、マイニング、テイラリング、トランスクーディング）と高機能パーソナル放送システムへの応用
- (2) 動画・画像・音声に対する情報ハイディングによるメディアセキュリティ（電子透かし、ステガノグラフィ、コンテンツ認証）
- (3) マルチモーダル環境センシングによる人間行動の認識理解
- (4) 暗号系とネットワークセキュリティ応用
- (5) ディジタル制御系の解析・設計

なお、これらのテーマはプロジェクト研究として推進しており、情報通信研究機構（NICT）・創造的情報通信技術研究開発推進制度「コンテクスチャル・メディアを用いたインタラクティブ視覚拡張型放送に関する研究」および科研費・学術創成研究費「人間同士の自然なコミュニケーションを支援する知能メディア技術」などの支援を得ている。また、京都大学や国際電気通信基礎技術研究所（ATR）とも連携を保ちつつ先端的な研究課題に挑戦している。

**情報科学研究科
情報システム工学専攻
情報システム構成学講座**



教授 尾上 孝雄
(電子・平3・M5)

本研究室は、その歴史を電子工学科第6講座（演算電子工学講座）に遡ることができます。昭和37年から58年までは尾崎弘教授、昭和62年から平成15年までは白川功教授が担当された。この間、数度の改組を経て、現在は大学院情報科学研究科情報システム工学専攻情報システム構成学講座となり、平成15年10月より尾上が担当している。現在の研究室の陣容は、教授 尾上孝雄、助教授 橋本昌宜、助手 畠中理英、藤田玄、密山幸男、大学院学生22名、学部学生6名である。

情報システム工学専攻では情報技術の基盤を支える応用情報システム・機器のハードウェア／ソフトウェア双方の設計、実装に係わる算法、構成法、評価検証法に係わる教育研究を遂行しており、このなかで本研究室では、特に情報家電機器などで用いられる半導体集積回路の設計に関する研究開発に従事している。これらは、従来のデータ処理に加え、画像や音声などの所謂メディア処理をこなす高い能力を有しつつ、モバイル環境での利用にも耐え得るよう小面積、低消費電力で実装される必要があり、最適なアーキテクチャ（構成手法）と最先端の設計技術 (SoC; Systems-on-a-Chip 設計技術)を駆使した設計の実践が必要不可欠である。これらの要求に沿うために、以下に代表される研究課題に取り組み、関連する学問分野の教育を行っている。

1. 次世代音声・動画像符号化・復号化のVLSI化設計

動画像符号化の次世代標準である H.264/JPEG 2000処理を実現するシステムの検討、および各処理過程(動き予測、オブジェクト抽出アルゴリズム、エラー隠蔽、音声認識)向けアーキテクチャの考案とそのVLSI化設計。

2. 空間音響処理そのVLSI化に関する研究

3次元音響の音源定位と立体音響の生成を低電力で実現するためのアルゴリズム開発と、ディジタル信号処理プロセッサを用いた実装およびVLSI化設計。

3. ホームネットワーク向け高性能プラットホームに関する研究

低コストホームゲートウェイの実現、従来の家電を収容する機器アダプタの開発、機器とホームサーバ間のデータ転送に用いる次世代通信用ベースバンド処理のVLSI化設計など、ホームネットワーク構築に向けた統合的な研究開発。

4. VLSIの実装技術に関する研究

5 GHzを超える周波数、1 V未満の電源電圧、200 Wを超える消費電力を持つ回路を「正しく」動作させるVLSI実装の要素技術として、微細デバイスを正確にモデル化する技術、動作を検証する技術、ならびに正しい動作を実現する実装技術の研究開発。

以上のように多岐にわたる研究活動の基本精神として、論文執筆を研究の終着点と捕らえず、実際のものづくり、あるいは実用化までを見守ることで、研究を机上の空論に終らせないよう進めて行く予定である。

退官された先生方の近況

塩澤 俊之（通信昭 39・M 41・D 44・大阪大学名誉教授）

平成16年3月末日をもちまして大阪大学を定年退官致しましたが、振り返ってみると、大阪大学には、昭和35年に入学以来、学生として9年間、教官として35年間、合わせて実に44年間の永きにわたり大変お世話になりました。この間、多くの先生方ならびに職員の皆様、研究室の同僚、卒業生および学生の方々から多大のご支援を頂き、教育と研究の職務を全うすることができました。特に、大阪大学における優れた研究環境のもとで、じっくりと電磁理論と電磁波工学を中心とした基礎研究に取り組むことができ、相対論的電磁理論とその工学的応用、自由電子レーザーの理論的研究および電磁波の人体への影響とその定量的評価などの分野において、国際的にも評価して頂ける研究成果をあげることができました。この機会に、これまでにご支援頂きました皆様方に心からお礼を申し上げます。

平成16年4月からは、名古屋市の郊外にある中部大学総合工学研究所に勤務しております。総合工学研究所は、工学の基礎および複数の学問分野を統合した学内プロジェクトの研究を行うことを目的に設置された大学附属の研究所であり、現在、(1)工学の基礎、(2)宇宙空間、(3)エネルギー、(4)材料、(5)構造、(6)環境・防災の6分野から構成されています。中部大学は、工学部、応用生物学部、人文学部、国際関係学部および経営情報学部の5学部からなる中規模の総合大学であり、中部圏では屈指の学術研究拠点の一つとして年々発展を遂げています。幸い、素晴らしい大学の環境と勤務条件、それに同僚にも恵まれ、毎週、大学構内にある職員宿舎と箕面の自宅の間を往復しながら、元気に第二の人生を送っています。なお、本年4月からは、工学部電子情報工学科に移る予定です。

話題は変わりますが、大阪大学を退官する間際の昨年1月、ライフワークの一冊として長年温めてきました英文著書の出版がようやく実現しました。出版社はドイツのシュプリンガーで、標題は「*Classical Relativistic Electrodynamics -Theory of Light Emission and Application to Free- Electron Lasers*」というものです。本書は、マクスウェルの電磁理論、AINシュタインの特殊相対性理論の基本から出発して、光の速度に近い高速度で運動する荷電粒子からの電磁放射（シンクロトロン放射、チエレンコフ放射など）、自由電子レーザーの基礎理論へと一步一歩着実に議論を進めています。読者層としては電気電子工学関係の研究者、大学院の学生を対象に、高度の内容をできるだけ分かり易く書いたつもりですが、実際には、むしろ高エネルギー物理や素粒子物理あるいはこれらの研究を支える加速器物理など、物理の分野で注目されているようです。因に、本書は、これらの分野で世界の中心的な研究機関であるCERN（欧洲核物理研究機構、ジュネーブ）、SLAC（スタンフォード線形加速器センター）、DESY（ドイツ電子シンクロトロン研究機構、ハンブルク）、KEK（高エネルギー加速器研究機構、つくば）をはじめ、プリンストン、MIT、CALTECH、コロンビア、シカゴ、コーネル、その他多数の米国の主要な大学、さらに、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、オランダ、カナダ、インド、中国、シンガポール、オーストラリア等の多くの大学の図書館に収蔵されています。ところで、AINシュタインの特殊相対性理論が発表されてから、今年でちょうど100年になります。本書が、荷電粒子からの電磁放射という応用面から見ても極めて重要な問題の考察を通して、AINシュタインの相対性理論の本質をより深く理解するための一助となればと願っております。相対論的電磁理論とその応用について関心のある方には、是非ともご一読頂ければ幸いです。

卒業生の近況

丸山 義弘（通信・S63・M）

投稿にあたり、改めてM2の就職活動の頃を思い出してみると、現在の会社（日本通運）の推薦を頂くため、就職担当の（故）手塚教授の教授室に入室したところ、「大阪大学の通信工学を専攻する学生たるもののが、通信とは縁もゆかりもない（物流の）会社に就職するとは、もってのほか」と一喝されたことが、印象に残っています。

しかしながらその物流業界も、以来15年を経過しますと、今や大手宅配便会社はGPSやカード決済機能を持つモバイル端末などをドライバーに持たせて差別化を競っており、グローバルに展開する総合物流会社、通信ネットワークを活用して日本国内にいながら海外の商品を瞬時に出荷し、また在庫状況もリアルタイムで把握できる仕組みを独自で構築するなど、情報通信技術を最も享受している業界の一つとなっているのは、通信工学を専攻したものとして嬉しい限りです。

私も入社当初は国内外の通信ネットワークのインフラ構築を担当していましたが、一段落して平成8年に大阪に転勤で戻ってからは、関西に本社、拠点を置く電機メーカーをお客様として、SCM（サプライ・チェーン・マネジメント）推進にともなう調達物流から販売物流にいたるプロジェクト案件で仕事をさせて頂く様になり、折りしも、平成12年に松下电工㈱グループの物流構造改革を推進する3PL会社（ナイス・ロジスティクス㈱）を共同出資で立上げるプロジェクトに参加することとなり、以来出向して、現在に到っています。

この業界に入り15年を過ぎましたが、最近の特にメーカーの構造改革においては、「研究開発」、「生産」、「マーケティング」などと並んで「ロジスティクス」というテーマが設定され、副社長クラスの担当役員を置く会社も増えています。しかしながら、「ロジスティクス」については、まだ大学においても専門講座を設けているところがほとんどありませんが、これからは専門性を高めていくものと考えています。

仕事のことばかりでしたが、私生活はというと、最近は少し太り気味なので週2回ほど近所のフィットネスクラブに通っています。なかなか胴回りの贅肉がとれません。やはり中年太りのようです。同期のみなさんはいかがですか？

河田 靖弘（通信・平1・M3）

現在、私は株式会社ケイ・オプティコムで情報通信事業に携っています。私が大学に入学した1985年に通信が自由化され、卒業するときには多くの通信事業会社が立ち上がってきましたが、当時はまだ携帯電話もなく、みんな工学部の食堂前の公衆電話に並んで電話をかけていたような時代であったと記憶しています。今のようなネット社会が到来するとは当時の私では予想もできませんでしたが、今その最前線で働けていることを幸せに感じています。ケイ・オプティコムは関西を基盤とした通信事業者で、主力商品は「eoホームファイバー」という家庭向光ファイバーアンターネットです。インターネットに加えて、「電話」「TV」などのサービスも光ファイバーで提供しています。学生時代には、有限要素法を用いた光ファイバー内の電波伝搬解析というような研究をしていたのですが、その光ファイバーをお客さまのご家庭まで引いてサービスを提供しているということ自体感概深いものがあります。

大学を卒業して16年もの歳月が経っています。同級のみなさん、旧熊谷研究室のみなさんは元気でやっているでしょうか。先日、同級の中村佳司君のご自宅に遊びに行ったのですが、彼が保有している研究室時代の写真をみて二人で夜中まで笑い転げてしまいました。そういえば、当時の熊谷研究室で貴重なショットを満載したアルバムをつくっていたのですが、今でもどこかに保存されているのでしょうか？馬鹿なことばかりやっていたパワーを研究に打ち込んでいれば私も立派な研究者になり得た（幻想？）かもしれません、こんな私を社会に送り出して下さった当時の松原正則先生・丸田章博先生に改めて感謝したいと思います。

木下 敏宏（電子・平2・M4）

平2年に電子工学科の尾浦研究室を卒業し、現在は三洋電機で有機ELディスプレイの事業部門に所属しております。私は電力用アモルファスSi太陽電池の開発に8年間従事した後、現在の有機発光デバイスの研究をはじめました。有機ELディスプレイの特徴は、自発光デバイスのため薄型化、色再現性、消費電力、応答速度、視野角などがLCDより優れていることで、現在は携帯電話のサブディスプレイやデジタルカメラのメインパネル用途として商品化されはじめた注目のデバイスです。開発当時は、デバイスとしての効率や信頼性が低く、苦労の連続でしたが、当社は有機ELデバイスの基本特許と多くの有機発光材料を発明したアメリカのKodak社と岐阜地区に合弁会社（SKディスプレイ）を設立して、世界で初めて低温Poly-Siを用いたアクティブ型のディスプレイを2003年に商品化を成功することができました。

有機ELディスプレイの商品化後、上司からMBA留学の話があり参加させていただけました。当社には社内留学制度があり、研究者であっても経営感覚を持つことが重要ということで、毎年20人程度が制度を利用しています。また、参加する半数以上が技術者であるというのが当社の特徴です。技術者がMBAを取っても仕方がないと思われる方もいるかとおもいますが、アメリカでは多くの技術者がMBA取得のためにビジネススクールに通っています。アメリカの某デバイス会社では、従業員の3分の1以上がMBA取得者で、毎年のように高収益をあげているようです。高収益の理由として、技術者が経営の知識を持つことで経営者の視点で研究開発をすすめることができるようになり、研究開発の成果から逆算して投資額の決定を行うなど技術と会社の利益を密接に考えながら研究を行っているためではないかと考えています。留学後、私は研究開発の一線から外れ、事業部門で技術、生産、販売をとりまとめる製品企画業務を任せられています。研究者としては見えなかった消費者からの製品に関する厳しい要求に対応したり、デリバリーに答えるための生産計画を調整したりと忙しい日々を送っています。留学で学んだ知識を、今後いかしていくことで有機ELディスプレイ事業の拡大を図り、将来的に高収益の事業に育てていきたいと考えています。

福井 宗一郎（電気・平6・M8）

吹田キャンパスを離れて早9年。不精な質のせいで、お世話になった母校の諸先生、先輩方との交流が疎くなっていることを気にかけていたところ、今回、寄稿依頼を受け、恩返しのきっかけにでもなればと、よろこんで執筆を引き受けさせて頂きました。

住友電工へ入社してからは、光ファイバケーブル敷設工事、IPネットワークインフラ構築、映像配信システム構築など、通信ネットワークで言うところの物理層からアプリケーション層に至までの比較的幅広いプロジェクトに携わってきました。在学時は電力工学講座に所属し直流送電やパワーエレクトロニクス関連の研究を主としていましたので、随分と電力分野から遠ざかったなあと思っていましたが、そんな矢先の昨春、社内異動でPLC（高速電力線通信）システムの開発業務に従事することとなりました。PLCとは、最近新聞紙上でも取り上げられることが多い、電力線を媒体として高速通信する技術です。電力と情報通信の融合の象徴とも言える技術で、電力工学とは切っても切れない縁を感じつつ、電力工学との技術的ブランクを埋めるべく、恥ずかしながら大学時代の古い教本を読み返し勉強させていただいている。

勤務地に関しては、入社以来、東京、横浜の関東エリアのみを転々として関西には縁がありません。関東に長く住むといつの間にか、関西色（話し言葉や言動、例えば"つっこみ"など）は薄まり、最近では出身大学を答えると多少の驚きの反応を得ることが多くなりました（奇しくも関西人に多い反応）。ただし、ここ最近は大阪への出張機会が多くなってきたので（月1～4回）、これをを利用して旧友や諸先輩と交流するなど、関西文化に触れる機会を増やしつつあるところです。また、今年は一度、初心を思い返すべく、大学へ立ち寄り北千里の風に吹かれたいとも考えているところです。

私生活では、週末は4歳と1歳の2児相手の格闘とでも言うべき激しいじゃれ合いで体を鍛え、月一回は、当時、研究室仲間と切磋琢磨した麻雀で頭を磨く生活を送っています。そのお陰か、幸いにも、仕事においては、心身ともに大きな衰えは感じることなく集中して打ち込むことができています。しかし、一方で、年1～2回は必ずつら

い風邪をひくようになり、腹部の緩みも気になるようになってきました。暖かい季節が来れば、肉体改造を視野に体を動かす新しい趣味に取り組みたいと考えています。

Tan Boon Keat (2002年 電子情報エネルギー工学専攻 博士後期課程修了、期間短縮・D14)

2年前、アジレント・テクノロジーに転職して、母国のマレーシアに帰国しました。私の場合、大学時代からLSI回路設計に関わって、使っていたプロセスもCADも現職場とほぼ同じです。そのため、入社してすぐ開発プロジェクトにかかわり、RGB LEDバックライトシステムで使うColor Sensorを開発していました。お客様および同事僚は日本人ですので、日本で留学する経験や日本語はとても役に立ちました。

今年から、去年関わったColor Sensorが生産し始め、これから新しいプロジェクトチームに入り、仕事のため短期間アメリカ勤務になりました。写真はサン・ホゼのアジレント・テクノロジーの前に子供と一緒に立ったものです。まったく新しい環境で、新しい仕事をスタートしますから、今年もがんばっていきたいと思っています。



岩橋 友也 (電気・平13・M15)

2003年春に電気工学専攻を修了後、松下電工株式会社に入社し、照明に関する研究開発に携わってきました。入社して3年目を迎え、ようやく仕事の進め方が分かってきました。幸いにも私が卒業した年から、当社と私の在籍していた研究室が共同研究を始め、卒業後も引き続き母校で実験ができるようになりました。会社と大学の両方で研究開発を進めております。また、入社2年目からは希望が叶い社会人ドクターコースに進学することができました。現在では、蛍光灯に置き換わる次世代照明として期待されているLEDを一般照明として実現させることを目標に研究を進めています。

しかし、初めから今のように前向きに研究ができたわけではありません。例えば会社から大学に戻って実験を始めた頃や、社会人ドクターコースに行き始めた頃は、自ら望んで進んだとはいえ、会社の中で業務を進めていく同期との違いに戸惑いを感じ、共同研究でよい成果が出せるのか不安でした。そこで電気工学専攻佐々木研究室の森先生が勧めているメンタルトレーニングを受けることで、人と異なることをすることの戸惑いや不安感が解消され、今では何事にも前向きに楽しみながら取り組むことができるようになりました。

まだまだ半人前ではありますが社会人として大学に籍を置くと、学部や修士の学生であったころでは分からなかった大学の面白さが分かります。先述したメンタルトレーニングもそうですが、その他にも医工連携で工学の技術で医療の分野に貢献できる研究等の異分野連携や工学研究科の学生がマネージメントの勉強に参加できるMOT (Management Of Technology) 等、様々な可能性が大学にはあります。

私は、幸いにも学生として母校に戻ってくることができました。会社と大学の両方で学べるチャンスを十分に活かし、日々、邁進したいと考えております。

学生の声

清水 新策（電子情報エネルギー工学専攻、D2 期間短縮修了予定）

桜咲き、雪が舞い散る三色彩道を歩くこと8年、大阪大学では色々なことを学ばせていただきました。また多くの良き先生方、友人達に恵まれたことは何よりの財産です。

学業に関して振り返ってみると、学部での4年間は電気、電子、情報、エネルギーと幅広い科目的授業を選択でき、知識の幅を増ための絶好の場を提供されていました。しかしその頃はサークル、バイトに没頭していたため、授業内容の理解は不十分なまま過ごしていました。

量子デバイス工学講座に配属後はLSI設計に関する研究を行っていました。配属後、学部時代に怠った基礎知識の重要さを初めて実感しました。回路設計には回路理論のみならず、電磁理論、統計学、数学解析等を初めとする多くの基礎理論が必要となり、またこれまで研究されてきた広い知識を得、研究成果を伝えるためには何より英語が必要でした。研究を進めながら遅れた知識を取り戻すことは大変でみじめなことではありましたが、それもまた良い経験となりました。

LSI設計は奥深く、また泥臭い作業でもありました。「ひとつのLSI」を設計するために必要な膨大なる「手間」と「知識」が必要であり、物を作ることの難しさを知った気がします。しかし、物理理論を知り、長年多くの研究者によって培われてきた研究成果を生かすことで新しい物を考えていくステップは、私が物を考える基本的なスタイルとして身につきました。

これより社会に出て行く身として、物作りに対する恐怖心はありません。それは研究室で培った経験があるためです。しかし今後社会で役立つ「物作り」を志す身として、学部時代に怠った基礎理論をもう一度習得し、社会に貢献していきたいと考えています。

金 宰完（Jaewan Kim）（通信工学専攻、D3）

大抵の日本人はほかの人の心を感動させる良い特徴を持っている。そのような強い印象は一生涯人の頭の中に残るはずである。大阪大学の大学院の研究システムにも多くの優れた特徴がある。大阪大学では、早くも学部4年生から研究室に配属されて、卒業論文を書き、殆どの学生が大学院に進学する。また、同じ研究室には複数の先生がいて苦労しながらも細かいところまで学生たちの面倒を見てくれる。韓国の研究室には先生は一人しかいないのでこのようなことは到底考えられない。また、博士学生が責任感をもって修士学生を引っ張り、また修士学生が学部4年生を引っ張るので特有の効率的な研究システムが出来ている。研究室全体が研究のことでの先輩、後輩を問わず一つの線で繋がれている。個人主義は日本も韓国も同じであるが、研究のことで互いに一つに繋がれば、個人主義を克服できるのではないだろうか。また、日本では博士学位を取るのに3年掛かるが韓国では5年以上掛かるのが常識となっている。これは日本の大学院の研究システムが研究成果を出すのにより効率的なシステムであるからではないだろうかと私は思う。ただし、私のように途中入学する留学生たちは残念ながらそのような優れたシステムの効果を味わうことが難しい。来日後、一年間は日本語の壁や研究室の雰囲気、そして住まいなどの雑用のことで研究だけに集中できなくなってしまう。さらに、もっと難しいのは先生や研究室のメンバーとの人間関係である。先生はより積極的な学生を優先しやすく、日本人の学生は自分のことで精一杯なので、色んな面で助けが必要となる留学生とよい関係性を結ぶのは簡単なことではない。留学生がこのようなBlack Holeに落ちてしまうと自分の限界を感じ、2年目からは郷愁に落ち込む恐れがある。そうなると、早く環境に慣れ、優れた研究業績を残したいという遠大な夢を持ってきた留学生たちの殆どが、3年目になると自分の目標を無事に卒業することに絞ってしまう。日本の文部科学省は、毎年留学生たちに奨学金を与え、授業料を免除したりしながら、留学生たちを支えていくため、多くの留学生たちが金銭的には恵まれている。ところが、留学生たちは悩みやトラブルの解消においてもそのような優れたH/Wシステムに依存しやすいのではないかと私は思う。健全な社会を構築するためにはH/Wシステム以外に、互いに愛で助けあうというS/W的なシステムが大切である。そうなると、留学生たちも日本の

学生たちと一緒に日本の優れた研究システムをゆっくり味わえるのではないだろうか。アメリカの Microsoft 社や日本の Soft Bank 社のように S/W 分野の発展が眩しい現在、大阪大学の優れた研究システムに S/W 的な要素も取り入れたら、というのが卒業生としての私の小さな関心である。

李 宝炫 (Lee Bo Hyun) (電気工学専攻、D 3)

2003年4月に大阪大学大学院後期課程を入学して今年3年生になります。留学生なら誰でもそうだと思いますが、日本に来た最初は言葉、生活仕方、研究など部分で何をしたら良いか、どうしたら良いか悩んだことがたくさんありました。そんな時に、私は伊藤研究室の皆様からたくさん助けていただきました。一人暮らしで研究室での生活時間が長い私にとっては研究室の人達はいい友たちでした。今年でみんな卒業して就職して寂しいですが、元気で社会生活できるように祈ります。そして異なる専攻の私に伊藤先生からの有益な研究上の御指導と暖かいご関心やご援助に対しては本当に感謝しています。先生からの御指導は色々な方向への考え方方が益々養成できるようにします。

私が行なっている研究は天然サファイアと合成サファイアの特性評価に関することです。今まで天然サファイアを様々な処理でその色を変える処理がたくさん行なわれています。その処理によって処理前より天然の珍しくていい色で変わることで価値を高めるのができるからです。しかしその処理の有無の区別が難しくて色々な研究が行なわれております。現在は破壊分析になる成分分析が主研究なので私の研究では新しい非破壊評価法を目指しています。またサファイアはワイドギャップ材料であるため、伝導電子や転送機構について研究が必要とされています。この研究で「電気的特性」に特化したのは、欠陥生成のメカニズムと発光特性が物質の電気・光学的な特性から理解できるからです。特にワイドギャップ材料の電気的特性に関する研究は、物理学に対しても寄与すると思います。私はこの研究による韓国と日本の交流及び共同研究の部分に寄与したいと思います。将来、在日の韓国の留学生として先端の技術を学び、自分の研究分野以外にも韓日両国の相互理解及び友好交流において貢献するために頑張って行きたいと思います。日本に留学することで研究以外にも日本の文化や風俗習慣を理解できるような体験は私の人生にとって重要な部分になると思います。日本での留学の機会をくださった方々に感謝しております。

お願い

ご住所・ご勤務先などが変更になられた方は、事務局まで隨時ご連絡くださいようお願いいたします。変更のご連絡は同封いたしました総会の出欠届、平成15年11月に発行いたしました「濁電会会員名簿」に綴じ込みの「訂正カード」、またはファックス、電子メールでも結構です。また、濁電会ホームページの「個人情報の変更」からも変更が可能です。

会員の受賞の情報、同窓会の開催記事などがございましたら、併せて事務局までお知らせください。出来る限り、本会誌に掲載させていただきます。

会員の方々のご活躍

叙勲・褒賞

藤井克彦 先生（電気・学28・旧）

瑞宝中綬章

戸石泰司 氏（電気・昭31・M33）

瑞宝小綬章

受賞（学会賞・学会フェロー称号等）

吉野勝美 先生（電気・昭39・M42・D45）

電気学会 電気学術振興賞論文賞

池田雅夫 先生（通信・昭44・M46）

（2004. 1. 1 より）

IEEE フェロー

大森 裕 先生（電気・昭47・M49・D54）

（2005. 1. 1 より）

IEEE フェロー

滝根哲哉 先生

西尾章治郎 先生

塚本昌彦 先生

電子情報通信学会 論文賞

熊谷貞俊 先生

土居伸二 先生

宮本俊幸 先生（電子・平4・M6・電気D9）

野川裕記 先生

秋山豊和 先生（情シス卒9・M11）

通信・放送機構ギガビットネットワークシンポジウム
先端技術賞

中井貞雄 先生（電気・昭36・M38・D41）

The Institute of Physics（英国物理学会）フェロー

森永規彦 先生（通信・M昭40・D43）

電子情報通信学会功績賞

村上孝三 先生（電子・昭46・M48）

西尾章治郎 先生

北山研一 先生（通信・昭49・M51）

電子情報通信学会フェロー

佐々木孝友 先生（電気・昭42・M44）

日本結晶成長学会貢献賞

三瓶政一 先生

ドコモ・モバイル・サイエンス賞

斗内政吉 先生

応用物理学会論文賞（解説論文賞）

岸野文郎 先生

北村喜文 先生

ACM SIGCHI ACE 国際会議 Excellent Paper Award

西尾章治郎 先生

塚本 昌彦 先生

原 隆浩 先生（情報システム・平7・M9）

船井情報科学振興賞

原 隆浩 先生（情報システム・平7・M9）

エリクソン・ヤングサイエンティスト・アワード

情報処理学会研究開発奨励賞

就任（学会の要職等）

白川 功 先生（電子・昭38・M40・D43）

電子情報通信学会 副会長

平成16年5月29日

佐々木孝友 先生（電気・昭42・M44）

日本結晶成長学会 会長

平成16年4月1日

池田雅夫 先生（通信・昭44・M46）

（社）計測自動制御学会 会長

平成17年3月1日

*会員各位のご活躍につきまして記載漏れがございましたら、何とぞご容赦ください。なお、受賞等本欄に記載すべき慶事がございましたら、隨時、溝電会事務局までご連絡いただければ幸甚です。

教室情報

▼平成 17 年度電気電子情報工学専攻役割分担

代議員 電気電子情報工学専攻長
電子情報エネルギー工学科長

森田 清三 教授

代議員代理（副専攻長）

電気電子システム工学部門長

システム・制御・電力工学コース長

伊瀬 敏史 教授

副専攻長 情報通信工学部門長

情報通信工学コース長

北山 研一 教授

副専攻長 量子電子デバイス工学部門長

量子電子デバイス工学コース長

栖原 敏明 教授

先進電磁エネルギー工学コース長 飯田敏行教授

電気工学就職担当・電気工学科目長 伊藤利道教授

通信工学就職担当・通信工学科目長 三瓶政一教授

電子工学科目長 尾崎雅則教授

電子工学就職担当 八木哲也教授

電子情報エネルギー工学就職担当 谷野哲三教授

近藤 正彦 教授 採用 17.5.1 電 情

塚本 昌彦 助教授 転出 16.10.1 情報科学
(神戸大学教授)

野川 裕記 講 師 転出 16.7.1 サイバー
((株)セキュアウェア取締役)

金邊 忠 学内講師 転出 16.4.1 電情エネ
(福井大学大学院工学研究科 助教授)

平田 晃正 助 手 転出 17.4.1 通 信
(名古屋工業大学 助教授)

戸田 裕之 講 師 転出 17.4.1 通 信
(同志社大学 助教授)

大川 剛直 助教授 転出 17.4.1 情報科学
(神戸大学 教授)

山本 幹 助教授 転出 17.4.1 通 信
(関西大学 教授)

北川 米喜 助教授 転出 17.4.1 レーザー研
(光産業創成大学院大学 教授)

安達 宏昭 助 手 辞職 17.3.31

* 電情=電気電子情報工学専攻、
電情エネ=電子情報エネルギー工学専攻、
情報科学=情報科学研究科、
レーザー研=レーザーエネルギー工学研究センター、
サイバー=サイバーメディアセンター、
センター、研究所等の協力講座の人事異動を含みます。

▼電気系人事 (平成 16 年 4 月 2 日～平成 17 年 4 月 1 日)

尾浦憲治郎 教 授 定年退職 17.3.31 電 子

吉野 勝美 教 授 定年退職 17.3.31 電 子

藤岡 弘 教 授 定年退職 17.3.31 情報科学

井澤 靖和 教 授 定年退職 17.3.31 レーザー研

松原 一郎 学内講師 定年退職 17.3.31 電 気

辻 毅一郎 総長補佐 就任 17.5.1 電 情

三瓶 政一 教 授 升任 16.6.1 通 信

宮本 伸一 助教授 升任 16.11.16 通 信

原 隆浩 助教授 升任 16.10.1 情報科学

尾崎 雅則 教 授 升任 17.4.1 電 情

片山 光浩 教 授 升任 17.4.1 電 情

兒玉 了祐 教 授 升任 17.4.1 電 情

滝根 哲哉 教 授 転入 16.6.1 通 信

(京都大学より)

井上 恭 教 授 採用 17.4.1 電 情

河仲 準二 助教授 採用 16.9.1 レーザー研

新田 直子 助 手 採用 16.12.1 電 情

森本 健志 助 手 採用 17.4.1 電 情

羽原 英明 助 手 採用 16.9.16 電情エネ

秋吉 政徳 助教授 採用 17.4.1 電 情

▼母校の教壇に立つ本会会員 (平成 16 年度)

- 電気工学専攻「特別講義」
関西電力(株)代表取締役 副社長
岸田 哲二(電気・昭38)
- 電気工学専攻「電気工学特別講義 I」
(株)神戸製鋼所 技術開発本部 開発企画部 企画担当次長
山本 直樹(電気・昭50・M52)
- 電気工学専攻「離散事象システム論」
川崎重工業(株)技術開発本部システム技術開発センター第三開発部 生産情報グループ長
長尾 陽一(電子・昭47・M49)
- 電気工学専攻「特別講義」
西日本旅客鉄道(株) 鉄道本部 電気部長
山本 正弘(電子・昭51・M53)
- 情報システム工学科目 1 「情報社会と職業」

シャープ（株）デジタル家電開発本部 プラットフォーム開発センター 所長
上田 徹（通信・昭56）
・通信工学専攻「通信工学特別講義」
(株)ルネサステクノロジ 第一事業本部 SOC事業部 SOC-IP開発部 カスタムIP開発グループ グループマネージャ
野上 博志（電子・昭60・M62・通信・D平10）
・通信工学専攻「通信工学特別講義」
日商エレクトロニクス（株） 代表取締役社長
辻 孝夫（電子・昭48）
・電子工学専攻「電子材料基礎論」
松下電器産業（株）半導体社 プロセス開発センター 主任技師
林 重徳（電気・昭57・M59・D62）
・電子工学専攻「電子工学特別講義II」
住友電気工業（株）常務取締役
吉田 健一（通信・昭39・M41）
・電子工学専攻「集積回路工学」
(株)ルネサンステクノロジ 知的財産権統括部 副統括部長兼特許部長
藤島 一康（電気・昭48・M50）
・電子工学専攻「光波電子工学」
福井工業大学 工学部電気電子工学科 教授
藤田 輝雄（電子・昭53・M55・D58）
・電子工学専攻「特別講義」
サントリー（株） 顧問
今西 正道（電子・昭39）
・電子工学専攻「電子工学特別講義I」
東京大学大学院 新領域創成科学研究 教授
柴田 直（電子・昭46）

・情報システム工学科目「情報社会と職業」
シャープ（株）デジタル家電開発本部 プラットフォーム開発センター 所長
上田 徹（通信・昭56）
・情報システム工学科目「ソフトウェア工学」
新日鉄ソリューションズ（株）産業ソリューション第一事業部 ERP第一統括グループ グループリーダ（部長）
森久 博（情報・D平12）
・情報ネットワーク学専攻「情報ネットワーク学特別講義I」
日本電信電話（株）NTTコミュニケーション科学基礎研究所 知能情報研究部 部長
上田 修功（通信・昭57・M59）
・情報ネットワーク学専攻「情報ネットワーク学特別講義II」
松下電器産業（株）コーポレートR&D戦略室 室長（兼）产学連携推進センター 所長
宮部 義幸（通信・昭56・M58）
・マルチメディア工学専攻 「マルチメディア工学特別講義II」
(株)富士通研究所 ユビキタスシステム研究センター センター長代理
村上 敬一（電子・昭49・M51）
・バイオ情報工学専攻「バイオ情報工学特別講義II」
工学院大学 CPDセンター 教授
管村 昇（電気・昭49・M51）

濁電会役員

平成16年度濁電会本部および支部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。○印は平成16年度、新たに就任された役員です（敬称略）。また、濁電会支部としては、東京、東海、北陸、中国、四国、九州支部が活動を行っています。役員氏名の他に、本部および各支部の連絡先を付記しておりますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

[本部]

会長
大西 良一（通信・昭32） 三菱電機（株）

副会長

○鈴木 育（電気・昭33） 兵庫県立大学
岩川 泰而（電気・昭34） 中国電力技術研究財団
池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学
佐治 学（電気・昭35） 愛知工科大学
永田 重幸（電気・昭36） 徳島文理大学
田中 祀捷（電気・昭37） 早稲田大学
浅田 勝彦（電子・昭38） 福井大学工学部
吉野 勝美（電気・昭39） 阪大工電子

幹事

佐々木孝友（電気・昭42） 阪大工電気
○朴 炳植（電気・昭43） 阪大情報科学
○谷口 研二（電子・昭46） 阪大電情
○〆木 泰治（電子・昭47） 松下電器産業（株）
後 哲夫（電気・昭48） NECシステムテクノロジー（株）
河崎善一郎（通信・昭48） 阪大工通信
○小河 泰輔（電気・昭49） 阪神電鉄（株）
田中 和弘（電気・昭49） ダイヘン
○岡島 雅明（通信・昭49） 三洋電機（株）
○横川 正道（電子・昭49） 住友電気工業（株）
乗松 孝好（電気・昭50） 阪大レーザー
山田富美夫（電気・昭51） (株) 東芝
山本 正弘（電子・昭51） 西日本旅客鉄道（株）
○鬼頭 淳悟（通信・昭51） シャープ（株）
庄中 永（通信・昭54） オムロン（株）
尾畠 義雄（通信・昭55） 関西電力（株）
○鈴木 俊久（電気・昭55） 富士通（株）

○長尾 哲（電子・昭55） 三菱電機（株）
西村 明夫（電子・昭55） 松下電器産業（株）
松本 正行（通信・昭57） 阪大工通信
○清水 哲司（電気・昭58） 西日本電信電話（株）
村上 匠且（電気・昭58） 阪大レーザー
○青木 淳（電気・昭59） シャープ（株）
長谷 裕司（電気・昭59） 三菱電機（株）
○長尾 真伸（電子・昭61） 住友電気工業（株）
多田 充宏（電気・平元） 関西電力（株）
森 勇介（電気・平元） 阪大工電気
○松岡 俊匡（電子・平元） 阪大工電情
○山田 佳弘（通信・平2） 日立製作所（株）
○遠藤 浩二（電気・平3） 三洋電機（株）
尾上 孝雄（電子・平3） 阪大情報科学

連絡先：〒565-0871

吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科電気系内

濁電会事務局 安井晴子

TEL 06-6879-7789 (ダイヤルイン)

FAX 06-6879-7774

E-mail: reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

[東京支部]

支部長

池田 博昌（通信・昭34） 東京情報大学
総会幹事団体 (株) 東芝、松下電器産業（株）
幹事団体代表 (株) 東芝
上村 芳明（通信・昭48）
柳町事業所 所長
TEL 042-548-5553
松下電器産業（株）

原田 修二
パナソニックシステムソリューションズ社
技術本部 本部長
TEL 045-544-3728

事務局

(株) 東芝
酒井 敏夫 (電気・昭54)
ミッショングリティカルシステム部
TEL 042-333-2701 FAX 042-340-8028
E-mail: toshio1.sakai@toshiba.co.jp

松下電器産業 (株)
吉田 稔彦 (電気・平9)
パナソニックオートモーティブシステムズ社
オーディオビジネスユニット
純正商品開発グループ
TEL 045-939-1652 FAX 045-931-0806
E-mail: yoshida.toshihiko@jp.panasonic.com

[東海支部]

支部長
佐治 学 (電気・昭35) 愛知工科大学
代表幹事・連絡先
〒456-0022 名古屋市熱田区横田2-3-24
中部電力(株) 基幹系統建設センター技術グループ
江本 邦夫 (電気・昭58)
TEL 052-682-3436 FAX 052-683-5617
E-mail: Emoto.Kunio@chuden.co.jp

[北陸支部]

支部長
○龍山 智栄 (電子D・昭47) 富山大学
代表幹事・連絡先
〒933-0235 新湊市海老江諫合1-2
富山商船高等専門学校 情報工学科
○木下 健治 (電子M・昭49)
TEL 0766-86-5272 FAX 0857-31-0880
E-mail: khl@toyama-cmt.ac.jp

[九州支部]

支部長
田中 祀捷 (電気・昭37)
代表幹事・連絡先
〒808-0196 北九州市若松区ひびきの2-4
九州工業大学大学院生命体工学研究科
金藤 敬一
TEL 093-695-6042
E-mail: kaneto@life.kyutech.ac.jp

[四国支部]

支部長
永田 重幸 (電気・昭36) 徳島文理大学
代表幹事・連絡先
〒761-0113 高松市屋島西町1850-1
西国電力(株) 総合研修所 技術研修グループ
○鈴江 隆志 (電気・昭54)
TEL 087-841-1561
E-mail: suzue09347@yonden.co.jp

[中国支部]

支部長
岩川 泰而 (電気・昭34)
中国情報システムサービス(株)
代表幹事・連絡先
〒730-8701 広島市中区小町4-33
中国電力(株) 流通事業本部
○白髭 修一 (電気M・昭46)
TEL 070-5920-0389 FAX 082-523-6307
E-mail: 585962@pnet.energia.co.jp
中国電力(株) 販売事業本部
エネルギー営業センター
○末盛 崇 (電気・平7)
TEL 070-5828-5092 FAX 082-523-6265
E-mail: 261631@pnet.energia.co.jp

同窓会だより

電気昭和26年卒同窓会

日 時：平成16年10月26日（火）

場 所：JR名古屋駅前

　　ホテルキャッスルプラザ3F 亀の間

出席者：西村先生、桜井先生

　　絹川、栗山、対尾、永田、本田

　　宮本、山本、田中、岡本、今村

　　計 12名



恒例の同窓会を西村先生、桜井先生の御出席を頂き
今年は7年振りに名古屋で開催しました。昼食のテーブルを囲んでの懇談は短い時間ではありましたが一年振りの再会を喜びお互いの近況を語り合い楽しいひと時を過ごすことができました。

卒業時38名だった級友も既に10名の方々が残念ながら鬼籍に入られ、また最近は体調を崩された方がめっきり増えて年々出席者が減り寂しい限りですが、元気で来年の再会を約して散会しました。

（今村 記）

昭和27年電気工学科 (略称：さんもく会)

昭和27年に電気工学科を卒業した41名のクラスメートの連帯充実を図るために、先ず関西四国在住の有志が平成15年7月15日に大阪で会合し、協議した結果、下記の申し合わせをしましたので、お知らせします。
また、連絡の取れない方の消息把握について、ご協力下さいようにお願いします。

1. 同窓生41名のうち、熊代昌弘兄、長谷川貞和兄、柳鱗善兄は連絡先が不明です。また、物故された方は11名です。
2. 同窓会の運営は、愛知県以東の東部在住者と西部在住者の2グループに分け、それぞれに世話人をお願いして別々に運営するが、東西の情報交換を密にして適時合同して会合を行うことにします。会則は作らず、簡素に運営致します。
3. 同窓会運営のため、平成17年から年に数回、奇数月の第3木曜日に集会する予定であります。
4. 当座の世話人（連絡窓口）は、
　　東部：喜多村幸蔵、松村 陸夫
　　西部：木本 保夫と中野 博
であります。
5. 略称さんもく会は、10数年前から関西在住の同窓生が10名前後、奇数月の第3木曜日、中央電気クラブに夕方集まって談笑していたが、今回改めて同窓生全体に致しました。

（木本、中野 記）

信二九会 卒業50周年記念同窓会 (通信昭和29年卒)

日 時：平成16年4月4～5日

場 所：京都 嵐山 松嵐荘

出席者：26名

秋山、石坂、板垣、大矢、小笠原、岸本、

北澤、金、日下、久保、桑木、近藤、芝田、

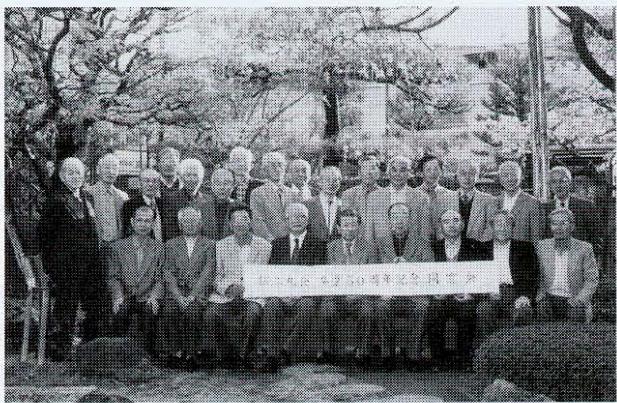
洲崎、瀧本、竹本、土橋、中原、中村、伏

見、前川、的崎、宮本、山中、弓場、由利

信29会は関東および関西それぞれローカルには毎年いくつかの会合を持っていますが、全体では5年ごとに集まっています。今年は5年ぶりの全体会で、卒業50周年の記念すべき年にあたり、京都嵐山で酒を酌み交わしつつ一夕を共にする会となりました。

桜満開の嵐山を舞台に、クラス総勢26名の参加を得て、久しぶりの再会を楽しみました。

一同の記念撮影の後、総会は会長の挨拶から始まり、経過報告等型通りに進められ、乾杯の後宴会にはいました。その間、それぞれの今までの人生、仕事などについてのショートスピーチをしてもらいました。長



い付き合いの友達の場合でも知られざる面の発見、再認識などがあり、大変興味深い時を過ごす事ができました。宴会終了後は別室で二次会となり、夜の更けるのも忘れていろいろな話題に花を咲かせました。皆さん全員健康そうで、年の割にはよく飲み、よくしゃべり、楽しい夜となりました。

翌日は朝食後自由解散となり、三々五々、天龍寺、渡月橋、トロッコ列車観光など、花の嵐山を愛でつつ帰途につきました。

(前川 記)

阪通57ゴルフ懇親会 (通信昭和32年卒)

日 時：平成16年7月15日（木）～16日（金）

場 所：松濤荘（松下電器保養所）

平塚富士見カントリークラブ

出席者：大西、木村、佐々木（寛）、佐々木（正）、
竹村、野口、久田、藤井、山本、
三善ご夫妻

平成12年4月に、京都の平八茶屋にてクラスの懇親が開かれた時に、これからは、年に一回、全国ベース（関東、中部、関西）でゴルフをやろうという事にな



り、関東が幹事を預かったのですが、なかなか実現に至らず、4年目にしてようやく重い腰をあげました。両佐々木が幹事になりゴルフをやる人を整理してみましたら16人いました。

今回は、岡崎、田部、辻、寺田、橋本（至）、長谷川（晃）君は都合が悪く欠席で、久田君は前夜の懇親会（写真が出席者全員）のみ出席。また、三善君の奥様が両方に出席（ゴルフの腕前は相当なものです）していただき、紅一点の花を添えていただきました。

前夜祭では、松濤荘自慢の料理は勿論ですが、野口君提案の、ゲーム「一期一会」ですっかり盛り上りました。翌日のゴルフは、晴天の時には綺麗な富士山が“どーん”と見える事で有名な平塚富士見でプレイしたのですが、残念ながら拝見できませんでした。成績の方は 三善君が優勝で山本君がブービー、ベスグロは大西君で89（本人はご不満のようです）でした。次回は中部担当です。

(佐々木正 記)

澪電会だより

澪電会ホームページのご案内

平成12年度から開始した澪電会ホームページでは、本会の各種活動内容をより積極的に会員の皆様にお伝えするとともに、皆様の利便性の向上を目指して情報公開に励んでおります。一昨年6月より大阪大学工業会（会長：熊谷信昭 元総長）のホームページであるテクノネットウェブ（<http://www.osaka-u.info/>）との連携を進めており、下記アドレスで365日24時間アクセス可能です。

<http://www.osaka-u.info/~reidenkai/>

主な内容と致しましては、新着情報、会長挨拶、澪電会からのお知らせ、会則、澪電会ニュース、母校のニュース、会費納入方法、個人情報の変更、澪電会役員一覧、関連リンク等となっております。特に、会費納入方法のページで年会費自動振込制度の申込みを依頼することや、個人情報変更のページで異動等の情報を澪電会事務局に知らせることなどが可能になっており、ご好評頂いております。また、各学科の卒業年度別会費納入情報も公開しております。さらに、各支部ホームページへのリンクも作成しております。上記テクノネットウェブとの連携を有効活用するためのいくつかの試みも考案中であり、今後更なる利便性向上に努めたいと考えております。

益々の充実化を図るため皆様のご意見を下記担当幹事まで頂戴できれば幸でございます。（ホームページからもご意見を送付可能です）

（朴 炳植 pak@ist.osaka-u.ac.jp（電気・昭43））

平成16年度総会・講演会・懇親会

平成16年度の総会・講演会は6月4日（金）大阪梅田新阪急ホテルにおいて162名の参加を得て開催された。総会は午後6時30分より尾上孝雄幹事（電子・平3）の進行役のもとで行われた。中西義郎会長（通信・昭27）の挨拶の後、平成15年度事業報告が藤岡弘総務幹事（通信・昭40）から、また平成15年度会計報告が佐々木孝友会計幹事（電気・昭43）から行われ、それぞれ承認された。

続いて中西会長より新会長として大西良一氏（通信・昭32）が推薦され、拍手で承認の後、大西新会長から

挨拶が行われた。続いて、鈴木胖新副会長（電気・昭33）の推薦と、新幹事21名の指名が行われ、拍手で承認された。引き続き佐々木孝友新総務幹事（電気・昭43）から平成15年度事業計画が、谷口研二新会計幹事（電子・昭46）から平成15年度予算の説明が行われ、いずれも拍手で承認された。また、会費納入に関する会則（細則）の変更が提案・承認され、総会を終了した。

総会に先だって、午後5時から講演会が開催された。尾浦憲治郎教授（電子・昭39）から「カーボンナノ材料の作製制御とその応用探索に向けて」の題目で、さらに引き続いて吉野勝美教授（電子・昭39）から「21世紀を支える基盤技術—有機エレクトロニクスとフォトニック液晶—」の題目でご講演を頂いた。両教授の長年の研究教育活動による大変興味深い内容の有益な講演であった。

総会の後は別室に移り、懇親会が佐々木孝友総務幹事の司会のもとで開催された。大西会長の挨拶の後、熊谷信昭名誉教授（元総長）（通信・昭28日）、藤井克彦名誉教授（電気・昭28日）から祝辞を頂戴した。引き続いて、各支部から頂戴した祝電の披露の後、中西義郎名誉教授（通信・昭27）の音頭で乾杯し、賑やかな歓談のひとときを楽しんだ。最後に吉野勝美副会長の発生のもと万歳三唱を行い、盛会裡に散会となった。

（尾上孝雄（電子・平3）記）

第22回澪電会見学会報告

日 時：平成16年11月12日（金）

場 所：日本原子力研究所 関西研究所
光量子科学研究中心

当日前夜からの秋雨もかろうじて上がり、今年度も年に一度の見学会を標記日程で無事とり行う事ができた。早朝8:30、参加者37名全員は、新大阪から見学地である関西原研・光量子科学研究中心（京都府木津町）に向か、既に貸し切りバスの車中にあった。往路、柳生の里にある柳生家・家老屋敷や菩提寺などを訪れ、いにしえの剣豪達を偲ぶと共に鮮紅に染まり始めた秋の山野を満喫することができた。

光量子科学研究中心到着早々、我等澪電会一

行は、所員の方々の実に丁重で行き届いた歓迎を受けた。田島俊樹所長、木村豊秋センター長等直々の全体説明に続き、一行は2班に分かれ、実験施設、計算機(ITBL)施設、「きっづ光科学館ふとん」といったバラエティに富む主要施設を順次見学させて頂いた。同センターは、先進的なレーザーの開発とその利用研究を推進するために、平成11年、日本原子力研究所の一施設として関西文化学術研究都市に建設された施設である。同センターでは、極短パルス・超高ピーク出力レーザー(Tキュー・ブレーザー)の開発によりX線レーザー等のX線光源やレーザー加速技術を実現し、X線レーザー顕微鏡、極微細加工、医学診断・治療等多方面に利用するための基礎研究を進めている。見学行程が進むにつれ、完備された内部の研究設備とその研究内容は質・量ともに世界最高レベルにあることの感を深めた。また、日本建築様式を取り入れた莊厳で落ち着いた雰囲気の建家外観は、研究棟のすぐ近くまで鹿が寄ってくるという日本の原風景とも言える古都奈良近郊にいかにもマッチしていた。予定通り見学を終えた一行は同センターを後にして、車中にて当日の回想談や往時の思い出話等に花を咲かせつつ、一路大阪に向けて帰途についた。

終わりに、当見学会の対応に当たられた光量子科学研究センターの方々ならびに万難を排して当日の見学会に御参加頂いた会員の皆様には、心より御礼申し上げたい。

日 程

8:30	J R新大阪駅集合
8:40-10:30	(移動)
10:30-13:00	柳生の里
13:00-13:40	(移動)
13:50-15:50	光量子科学研究センター見学
16:00-17:30	(移動)
17:30	J R新大阪駅到着 解散 (乗松孝好(電気・昭50) 村上匡且(電気・昭58) 記)

平成16年度電気系卒業祝賀・謝恩会

平成16年度電気系卒業祝賀会は平成16年3月25日(金)卒業式当日の午後6時から、千里阪急ホテル・仙寿の間において開催された。卒業生数356名にご来賓、電気系職員、湯電会役員の方々をあわせて総出席者数は455名にもおよんだ。

式典の部は谷口研二幹事(電子・昭和46)の司会で

進められ、最初に湯電会会长・三菱電機(株)社友の大西良一様(通信・昭32)から祝詞を戴いた。ついで大阪大学元総長・大阪大学名誉教授・兵庫県立大学学長の熊谷信昭先生(通信・昭28)、湯電会元会長・大阪大学名誉教授の藤井克彦先生(通信・昭28)、(株)NTT・代表取締役副社長の山田隆持様(通信・昭46)のご三名から来賓の祝詞を戴いた。最後に電気系教官代表として、電気工学専攻教授の杉野隆先生(電気・昭47)から祝詞を戴いた。このあと、各支部からの祝電の披露があり、パーティーに移った。

パーティーの部は森勇介幹事(電気・平元)の司会ですすめられた。まず、湯電会副会長・兵庫県立大学副学長の鈴木胖先生(電気・昭33)のご発声で乾杯し、歓談に移った。宴もたけなわの頃、大西会長より楠本賞 NG WEE HIAさん(電子工学科目)、工学賞の高橋直之君(電気工学科目)、庄司竜太君(通信工学科目)、RANATUNGA V. SANJEEWA君(情報システム工学科目)、および賞の次点者の下條亮平君(電気工学科目)、浅原誠之君(通信工学科目)、川平雄一君(電子工学科目)、吉村匠二君(情報システム工学科目)への記念品の授与があった。このあと、恒例の福引き、お餅つきが賑やかに行われ、ついで卒業生の代表として電気工学専攻・博士前期課程の梅田秀一君から教官および湯電会諸先輩への感謝と将来への決意が述べられた。最後に湯電会副会長・電子工学専攻教授の吉野勝美先生(電気・昭39)の音頭で万歳三唱し、めでたく、祝賀・謝恩会はお開きとなった。

ご臨席賜り、祝辞を戴きましたご来賓の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご多用中にもかかわらず、臨席戴きました電気系職員の方々にお礼申し上げます。湯電会事務局の安井晴子様にはいつもながら献身的に会の準備にあたっていただき、さらには電気系秘書の方々、一部の学生諸君には準備・受付業務などをお手伝い戴きました。これらの方々に心よりお礼申し上げます。今年も快く記念品、福引きの景品を寄贈戴きました(株)日立製作所、三菱電機(株)、(株)東芝、オムロン(株)、関西電力(株)、三洋電機(株)、シャープ(株)、住友電気工業(株)、(株)ダイヘン、西日本旅客鉄道(株)、NTTグループ各社(西日本、ドコモ、レゾナント、コムウェア、マーケティングアクト)、阪神電気鉄道(株)、富士通(株)、松下電器産業(株)、(株)RENESASの各社様に厚く、お礼申し上げます。

(谷口研二(電子・昭46)記)

平成16年濬電会東京支部総会報告

平成16年濬電会東京支部総会が4月23日午後6時よりのメルパルク東京にて開催されました。ご来賓として、中西義郎会長、桜井良文元会長、藤岡弘総務幹事、河崎善一郎教授、白川功名誉教授、事務局の安井晴子様、また、大阪大学工業会東京支部から副会長の服部毅様にご臨席頂きました。基礎工学部からのご参加7名を含め、総勢108名の盛会がありました。

今回は、総会幹事会社のアレンジにて、「人を活かす、チームを創る」と題した大田垣耕造様（シドニーオリンピック野球監督、現東芝横浜事業所長）の講演会を実施いたしました。選手・コーチ・監督としてご活躍された野球において、成長する選手の資質、プロとアマとは何が違うのか、オリンピックでの苦労話など興味深い話が続き、最後はアテネオリンピックのドリームチーム構想まで披露いただきました。会員にも野球についてはご意見ある方も多く、講演会のQ&Aだけでは時間が足らず、懇親会にても質問攻めにあわれていた様子でした。

続く懇親会では、まず、4月10日にご逝去された元東京支部長の小島卓哉先生のご冥福を祈り、全員で黙祷をささげました。続いて池田博昌支部長から、卒業生の世代間を結ぶ濬電会の活動をさらに発展させ、後進のフォローを進めたいとの挨拶があり、中西義郎会長からは、わが国の活力源泉は科学技術であり、濬電会会員の更なる活躍を期待したいとのお言葉を頂きました。続いて桜井良文元会長のご発声にて乾杯。和やかな歓談のなか、藤岡弘先生から濬電会の近況を、河崎善一郎先生から大学の近況をご報告いただきました。白川功先生からは中ノ島センターの建設に伴う苦労話も含めご挨拶いただき、大阪大学工業会東京支部副会長服部毅様からは、囲碁対局のエピソードも交えご祝辞をいただききました。会も後半へ進行し、bingoゲー



（酒井敏夫（電気・修昭56）記）

平成16年度北陸支部総会・見学会報告

濬電会北陸支部は、10月30日（土）に富山県高岡市で見学会を行うとともに、平成16年度総会（第15回）と懇親会を開催しました。本部より、大西良一会長、吉野勝美副会長、谷口研二総務幹事、事務局の安井晴子様をご来賓としてお迎えし、総勢13名の参加となりました。今年度は例年よりも開催時期が遅くなり、当日は所用で参加できなかった方もおられ、参加者は昨年よりも少なくなりました。

当日、JR高岡駅に集合した後、歩いて端龍寺を拝観しました。端龍寺は加賀藩二代藩主前田利長公の菩提寺として建立されましたが、江戸初期の禅宗寺院として高く評価されています。仏殿、法堂、山門の三棟は国宝に、大茶堂、その他は重要文化財に指定されており、尊厳さが感じられました。その後、タクシーで総会会場である高岡商工レストランに向かいました。

総会は、浅田支部長の挨拶で始まり、北陸支部15周年記念誌発行に関して報告されました。続いて、大西会長にご挨拶いただいた後、仁木庶務幹事より平成15年度の事業報告、会計決算報告があり、承認されました。また、今年度は役員改選があり、龍山新支部長および9名の幹事が指名され承認されました。龍山新支部長から高岡市での支部総会開催に関しての挨拶、今年度の事業計画と予算案の説明の後、谷口総務幹事より本部の報告をしていただきました。

引き続き、北陸支部15周年記念として吉野勝美先生の特別講演「自然に学び、調和する夢のある科学技術—有機エレクトロニクスとフォトニック結晶—」がありました。当初予定していた古城公園散策は雨天で中止となり、吉野先生には懇親会開催までの1時間半の間、ご講演いただきました。先生が大学に入られた頃のエレクトロニクスに関して、真空管から半導体技術が発展するまでの歴史的経緯を話された後、今後は有機得エレクトロニクス材料の重要性が増大することを、ノーベル賞を受賞された白川先生の導電性高分子の研究とも関連づけて分かり易く説明されました。講演では、



昔の東野田キャンパスや吹田キャンパスができた頃の工学部の写真も紹介され、大学の研究室や国際会議での様々な話題とともに、総会参加者は興味深く聴講しました。

その後、同レストランで懇親会が行われました。参加者は12名と例年よりも少な目でしたが、龍山新支部長の挨拶で始まり、一人ずつ近況を報告して親交を深め、来年の再会を期して散会しました。

(木下健治 (電子修士・昭49年) 記)

平成16年度東海支部総会・見学会報告



11月3日(水)、平成16年度瀬電会東海支部総会・見学会が開催されました。今回は、三洋電機株式会社の岐阜事業所にて、SOLAR ARK設備などの見学の後、事業所に隣接する同社スポーツセンターをお借りして、総会および懇親会が行われました。澄みきった秋晴れの中、ご来賓として瀬電会元会長の大西先生、副会長の鈴木先生、総務幹事の佐々木先生、そして事務局の安井晴子様をお迎えし、倉岡澄様(電気・昭22)佐治學 支部長(電気・昭35)をはじめ、総勢26名の盛会となりました。

総会に先立ち行われた見学会では、SOLAR ARK設備を内部から見学した後、有機ELディスプレイや次世代移動体通信など、最新の研究開発状況についても詳しくご紹介いただきました。東海道新幹線からの眺めでも有名なSOLAR ARK設備は、幅315mという巨大な骨組みをわずか4本の足で支える構造に、太陽電池パネルを満載したもので、建設当時の迫力あるビデオ画像には一同感心していました。次に、厚さわずか2ミリという、有機ELディスプレイ上に表示される美しく明るい動画に注意深く見入り、あと数年足らずでTVに実用化できるとのご説明を受けました。これらは全て半導体技術の結集であるとともに、省エネ、省資源など同社のクリーンエナジー社会実現への取組みのシンボルでもあり、環境問題についての前向きな企業姿勢を伺い知ることが出来ました。

続いて、隣接するスポーツセンターに会場を移しての総会では、大西元会長から、大学も独立法人となり、学外、アジアなど海外へ向けての活動も活発になってきたこと、次いで佐々木総務幹事から、時代に先駆けて専攻の統合が進む学内の様子についてご紹介いただきました。夜に行われた懇親会では、倉岡様の乾杯音頭の後、鈴木副会長はじめ、全員の方々から近況をご披露いただき、岡本 明様(電子・昭58)のご発声による万歳三唱で再会を誓い合い、お開きとなりました。最後に、見学会、総会および懇親会会場のお世話をいただいた、森本 庸一様(通信・昭44)、山中 良泰様(電子・昭52) 壇 徹様(電子・昭58)ほかのサンヨー電機の皆様方には、厚く御礼申し上げます。

(江本邦夫(電気・昭58)、高田 亨(電気・昭60) 記)

平成16年度瀬電会中国支部総会

瀬電会中国支部は、12月4日(土)、本部から櫻井良文元会長、大西良一会長、総務幹事佐々木孝友先生、事務局安井晴子様をご来賓としてお迎えし、さらに基礎工学部電気工学科の卒業生2名にもご参加いただき、総勢18名の参加者を得て、広島市の中国電力(株)広島中央変電所と、府中町のダイヤモンドシティ・ソレイユにおいて見学会を、同じキリンビアパーク広島内の会場で支部総会を実施した。

当日はあいにくの雨となりましたが、JR広島駅に集合後、バスで中国電力(株)広島電力所に移動し、望月所長のご案内で広島中央変電所を見学しました。当施設は、事務所ビルの地下に設置されており、地中ケーブルで郊外から22万Vを引き込み、広島市中心部



へ電気を供給しています。工事コスト削減策として、様々な工法・システムを採用されたご苦労について説明いただきました。

続いて、ダイヤモンドシティ・ソレイユに移動し、中国電力（株）販売事業本部の佐藤副長のご案内で、蓄熱受託設備を見学しました。

見学会終了後、会場を移し、支部総会を開催しました。

総会は岩川支部長の挨拶から始まり、大西会長から濬電会の実情説明を含めたご挨拶を頂き、佐々木先生からは専攻の再編等、母校の近況についてご紹介頂きました。

続いて議事に入り、平成15年度の支部会計報告等について全会一致で承認され、最後に参加者全員で記念写真撮影を行い、総会は無事に終了しました。

その後、懇親会に移り、櫻井元会長の乾杯の音頭により懇親に入り、参加者全員の自己紹介・近況報告を含めあっという間に時間が過ぎ、最後に白髪様の乾杯の音頭で来年度の再会を期して散会となりました。

最後に、土曜日にもかかわらず見学会でご案内頂いた中国電力（株）の望月所長、佐藤副長に紙面を借りてお礼申し上げます。また、中国支部の会員の皆さまには、ご都合が合いましたら、来年度の支部総会に是非ともご参加下さいよう、お願い申し上げます。

（末盛 崇（電気・平7）記）

平成16年度四国支部総会議事録

濬電会四国支部は、1月29日（土）に支部総会・懇親会をJR高松駅近くのホテルニューフロンティアで開催しました。四国支部では、前回の総会・懇親会を平成13年12月に高松市で開催してから2年間のブランクがあり、3年ぶりの開催となりました。

当日は、厳寒の季節にもかかわらず、比較的暖かい良いお天気に恵まれ、本部より櫻井良文元会長、大西良一會長、佐々木孝友總務幹事、安井晴子様をご来賓としてお迎えし、四国支部からは永田重幸支部長はじめ総勢15名の参加者を得ることができました。JR高松駅周辺は、近年のサンポート高松（高松港頭地区）開発事業で街の景観変化が著しく、遠くから訪れた参加者は驚いているご様子でした。総会は山田宏之幹事の司会で、永田支部長の挨拶から始まり、大西会長からの挨拶、佐々木總務幹事から母校近況報告を頂きました。

永田支部長からの挨拶では、久しぶりの支部総会開催に至った経緯や次回支部総会開催に向けての抱負について、大西会長からの挨拶では、濬電会本部事業の近況や若年者層の濬電会に対する意識などについて、佐々木總務幹事からの報告では、独立行政法人化された大学の近況や大学の組織変更の歴史などについてお伺いすることができました。引き続いて、議案審議に移り、鈴江より平成16年度の活動計画および予算についての報告があり、全会一致で承認されました。

総会の最後に参加者全員で記念写真撮影を行い、総会は無事に終了しました。

総会の後、同じ場所において懇親会に移り、櫻井元会長の乾杯のご発声により懇談に入りました。ころあいを見計らって、途中、参加者全員による自己紹介と近況報告を行い、杯を酌み交すなどしていると、瞬く間に時間が経過してしまいました。名残惜しさを胸に秘めながら、盛会のうちに閉会の予定時刻となり、最後に山下一彦前支部長の音頭で3本締めを行い散会となりました。

ご多忙の中、ご出席いただきました皆様方に感謝いたします。



（鈴江隆志（電気・昭54）記）

平成16年度九州支部総会・見学会報告

濬電会九州支部は1992年の発足以来、九州各県で活躍中の会員の皆様が参加しやすいよう九州各地に場所を移して総会を行ってきました。今回は数を重ねること13回目の総会になり、北九州近郊で見学会とともに開催しました。

今回は、本部より佐々木孝友総務幹事、櫻井 良文元会長、安井 晴子事務局殿にお出で頂き、支部からは田中 祐捷（気S37）、河村 寿三（気S29）、須川 嘉幸（気S37）、金藤 敬一（気S46）、中村 健一（気S63）、上田 啓史（気S61）、吉村 猛（子S47）、内藤 正路（子H1）、田口 彰（気H7）、吉水 清文（気S62）、長尾 孝信（気H8）、小杉 成史（気H5）、山本 拓郎（気H5）、有永 真司（気S56）、三谷 康範（気S56）、服部 励治（気S61）、小森 望充（基礎工電気S57）が出席しました。若手から多数参加をいただきました。

午後1時に小倉駅に集合し、最初に北九州市のエコタウンを見学しました。エコタウンセンターの三根様の詳細な説明を受け、リサイクルを主体とした各種の事業内容を知ることができました。その後、響灘にある風力電力（1,500 kw 10基）を見学し、真下から見ることによりその大きさに圧倒されました。

若松地区の見学を終えて、門司レトロ地区に向かい最初にNTT門司電気通信レトロ館を訪れました。懐かしい交換機に手を触れながら感慨に耽ることができました。その後、レトロ地区を散策し、場所を新日鐵（株）殿の大谷会館に移し、午後5時半から総会を始めました。田中支部長挨拶の後、九州支部の事業と会計報告を承認し、閉会しました。引き続講演会では佐々木先生から母校の最近の活動状況についての御話と先生の最近の研究のご紹介をいただきました。

その後、同会館にて懇親会が行われ、会員同士の尽



きない会話で盛り上りました。会場の手配ではニッテツ八幡上田氏にお世話をになりました。この場を借りて謝意を表します。

来年以降も、会員皆様のご参加と協力を願いいたします。

（服部 励治（電気・昭61）記）

平成16年度濬電会ゴルフ例会報告



濬電会ゴルフ例会は、平成16年度で99回の開催を誇る、濬電会内の親睦を図る伝統的なゴルフコンペで、昨年度も春秋の2回、三田市郊外の武庫ノ台ゴルフコースで開催されました。

コンペは、一般の部とシニアの部（満年齢65才以上）に分けて優勝を競われています。昨年度の結果は、以下のとおりとなりました。

	第98回	第99回
開催日	H 16.6.20(日)	H 16.11.23(火)
参加者数	2組8名	2組8名
一般の部 優勝	浜場邦洋（子52） gross 8 7 H.C. 9 Net 7 8	中川興史（電42） gross 8 1 H.C. 6 Net 7 5
シニアの部 優勝	大西良一（通32） gross 9 2 H.C. 1 1 Net 8 1	西山 昌（通27） gross 1 1 9 H.C. 1 9 Net 1 0 0

第98回は、台風が近畿を直撃するのではと心配されました。みなさんの願いが通じたのか当日は晴天の中、大西会長にもご参加いただき、最後まで楽しくプレイしていただきました。一般の部では浜場さんが、シニアの部では大西会長がそれぞれ優勝されました。第99回は、絶好のゴルフ日和の中、美しい紅葉を眺め

ながらのコンペとなりました。一般の部では中川さんが、シニアの部では西山さんがそれぞれ昨年に引き続き優勝されました。

ゴルフを終えた会食の場では、表彰式の後、両優勝者をはじめ、各賞受賞の皆さんからコメントを頂戴し、ゴルフの話で盛り上がる中、次回は同期の友人を誘い合わせのうえ、出席を誓い合い、三々五々帰途につきました。

今年度につきましても昨年度同様、

第100回 6月19日（日）9：01スタート

第101回 11月23日（水）8：54スタート

の2回、武庫ノ台ゴルフコースで開催を予定しており、それぞれ7組（28名）ご用意しております。6月に開催されます春の例会は、記念すべき第100回大会でござります。記念大会ということで、盛大に開催したい

と考えております。お申し込みは、はがきまたは電子メールにお名前、卒業学科、卒業年次、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）をご記入の上、開催1ヶ月前までに濱電会事務局へご連絡下さい。同期の方と一緒に回るなど、ご希望がございましたら、その旨を追記していただければ極力配慮させていただきますので、お誘い合わせの上、奮ってご参加いただきますようご案内いたします。ご参考までに、参加費は30,000円、先着28名様までお受けさせていただきます。

（多田充宏（電気・平元）記）

中西義郎元濱電会会長を偲んで

中西義郎先生は昭和27年3月に大阪大学工学部通信工学科を卒業後、直ちに同大学院研究奨学生となられ、昭和32年4月近畿大学理工学部講師、昭和34年同助教授を経て、昭和36年5月より大阪大学工学部講師に任せられました。更に昭和37年4月に大阪大学助教授となられ、昭和47年10月大阪大学教授に昇任され、通信工学第二講座（有線工学）を担当され、昭和64年3月に停年退官されました。その後も奈良工業高校専門学校校長や大阪高等研修所等にも関係され、本零電会の会長を平成14年から15年まで勤められました。

本会の会長を終られたあとも御元気でしたら、平成16年9月14日の昼頃に急に体調不良を奥様に訴えられたので、救急車で病院にかたぎ込まれましたが、そのまま亡くなられました。死因は、腹部大動脈瘤破裂によるショック死で、全く苦しまず亡くなられたそうです。死顔も眠ったように安らかだったそうです。

ご家族の意志で身近な方だけで葬儀が行われました。亡くなられたという連絡もしばらく日を置いてなされたので、多くの方には寝耳に水の感があり、私も連絡を受けたときは信じられず、自宅に戻って奥様からの葉書でやっと理解したしだいです。12月12日に同じく教えを受けた関西大学の榎原助教授と御自宅を訪問して、奥様と懐かしい話に花を咲かせてきました。

私は中西先生が御専門を電磁気からシステム工学に替えられたときに学部の4年生として中西先生門下として入り、大阪大学助教授時代まで弟子として仕えてきたので中西先生の性格は部下としてですが理解していました。その意味では、亡くなられ方も中西先生らしいなあと思いました。実は連絡を受けた日は朝刊で叙勲の名前を見ていたので何か虫が知らせるものがあったと思いました。

私にとって中西先生は阪大時代の保護者だったと思っています。特に1986年に通信工学科にLANを張って以後、JUNETからインターネットの勃興期に、あまり研究もせずに関西のインターネット立ち上げに走り回っていた時に、一言も文句も言わずに暖かく見守っていたのは終生忘れられません。今のインターネット時代の影の功労者だと思っています。

奥様もお元気で、お二人の息子さん達も活躍されていると伺っています。お墓はJR高野口の近くだそうです。一度、中西研同窓会を開いて、その時の写真等を持って墓参りをしようかと考えています。

（中野秀男（通信・昭53・M 55・D 58）記）

ご寄付

平成16年度には以下の方々からご寄付を頂いております。ここに記して厚く御礼申し上げます。

上西 康晴 様（電学・昭28旧）	¥4,000
水谷 博 様（通学・昭19）	¥4,000
東島 隆治 様（通学・昭28新）	¥4,000
田中 恒久 様（通学・昭23）	¥4,000
升田 公三 様（電修・昭31）	¥4,000
金 鉉佑 様（通博・昭37）	¥4,000
二俣 隆 様（電修・昭56）	¥12,950
吉野 勝美 様（電博・昭47）	¥100,000

クラス委員

(電気工学科・電気工学科目)

大正14年	久野 坪輝 (日光電機製作所)
昭和5年	石田 勝藏
12年	落合 岩男
14年	石崎 長光
15年	東野 俊一 (住友電気工業)
16年	高田 源次
17年	中井 實
20年	樋口 正樹 (ビジネスライブの会)
22年	山下 義美 (山下経営研究所)
23年	山中千代衛 (レーザー技術総合研究所)
24年	甲佐 史郎
25年	辻 良夫
26年	近藤 道治
27年	木本 保夫
28年旧	藤井 克彦
28年新	辻 三郎 (和歌山大学)
29年	升田 公三
31年	寺崎 泰彦 (寺崎電気産業)
32年	大川進一郎 (大川創業)
33年	鈴木 胖 (姫路工業大)
34年	白藤 純嗣 (福井工業大)
35年	松浦 虔士 (松浦電力技術研究所)
36年	濱口 智尋 (高知工科大)
37年	黒田 英三 (福井工業大)
38年	山中 龍彦 (福井工業大)
39年	吉野 勝美 (阪大・工)
40年	赤澤 堅造 (阪大・情報科学)
41年	辻 肇一郎 (阪大・工)
42年	佐々木孝友 (阪大・工)
43年	朴 炳植 (阪大・情報科学)
44年	谷内田正彦 (阪大・基礎工)
45年	織田 守昭 (大阪ガスエンジニアリング)
46年	土師 総一 (ジェイアール西日本伊勢丹)
47年	大森 裕 (阪大・先端科技共同センター)
48年	原 格 (関西マルチメディアサービス)
49年	田中 和夫 (阪大・工)
50年	伊藤 利道 (阪大・工)
51年	木村 紀之 (大阪工業大)
52年	山本 正純 (TM T & D)
53年	阪部 周二 (京都大)
54年	白神 宏之 (阪大・レーザー研)
55年	伊瀬 敏史 (阪大・工)
56年	三谷 康範 (九州工業大)
57年	裏 升吾 (京都工芸繊維大)

58年	尾崎 雅則 (阪大・工)
59年	江川 泰弘 (関西電力)
60年	秋葉 龍郎 (電子技術総合研究所)
61年	服部 励治 (九州大)
62年	佐伯 修 (阪大・工)
63年	藤井 龍彦 (阪大・基礎工)
平成元年	森 勇介 (阪大・工)
2年	仙井 浩史 (マッダ)
3年	舟木 剛 (京都大)
4年	岩井 真 (日本ガイシ)
5年	藤田 和久 (阪大・院)
6年	板垣 鉄平 (ソニー)
7年	川瀬 博基 (阪急電鉄)
8年	斎藤 貴光 (松下電器産業)
9年	中島 弘朋 (防衛庁)
10年	矢野 雅一 (松下電器産業)
11年	緒方 晋也 (富士通)
12年	山下 勝則 (日立製作所)
13年	小谷 研太 (阪大・院)
14年	犬伏 雄一 (阪大・院)
15年	小島 鉄也 (三菱電機)

(通信工学科・通信工学科目)

昭和17年	尾崎 弘
18年	藤澤 和男
19年	黒田 一之
20年	滑川 敏彦
21年	来住 徹 (高機能材料工学研究所)
23年	伊藤 肇
24年	奥野 喜好
25年	竹内 信雄 (伸和エンジニアリング)
26年	長岡 崇雄
27年	中西 義郎
28年旧	福井 淳一 (アドニスエンジニアリング)
28年新	末田 正
29年	由利 宏二
30年	倉橋浩一郎
31年	栗岡 豊
32年	長谷川利治 (京都大)
33年	宮道 繁 (エム・システム技研)
34年	樹下 行三 (大阪学院大)
35年	西原 浩 (放送大)
36年	野村 康雄 (関西大)
37年	真田 英彦 (追手門学院大)
38年	中西 曙 (阪大・言語文化)

39年	塩澤 俊之 (阪大・工)	45年	杉本 哲夫 (住友電気工業)
40年	藤岡 弘 (阪大・情報科学)	46年	谷口 研二 (阪大・工)
42年	宮原 秀夫 (阪大・総長)	47年	木 泰治 (松下電器産業)
43年	玉川 允敏 (日立システムアンドサービス)	48年	栖原 敏明 (阪大・工)
44年	池田 雅夫 (阪大・工)	49年	村上 敬一 (富士通研究所)
45年	中野 秀男 (大阪市立大)	50年	山田 伸一 (NTTデータ)
46年	里村 裕 (大阪工業大)	51年	西川 博昭 (筑波大)
47年	森下 克己 (大阪電気通信大)	52年	中前 幸治 (阪大・情報科学)
48年	河崎善一郎 (阪大・工)	53年	岡田 満哉 (日本電気)
49年	北山 研一 (阪大・工)	54年	藪内 康文 (松下テクノリサーチ)
50年	樺澤 哲 (Panasonic Technologies Inc.)	55年	太田 快人 (阪大・工)
51年	鬼頭 淳悟 (シャープ)	56年	出口 弘 (神戸女学院大)
52年	井上 健 (オタワ大)	57年	河合 利幸 (大阪電気通信大)
53年	中野 幸男 (Hitachi Telecom Inc.)	58年	森 俊彦 (富士通研究所)
54年	馬場口 登 (阪大・工)	59年	正田 博司 (NTTコムウェア)
55年	秦 淑彦 (三菱電機)	60年	綿森 道夫 (高知工科大)
56年	片山 正昭 (名古屋大)	61年	森 伸也 (阪大・工)
57年	榎原 博之 (関西大)	62年	重弘 裕二 (大阪工業大)
58年	山本 幹 (阪大・工)	63年	藤村 昌寿 (阪大・工)
59年	平 雅文 (阪大・工)	平成元年	野口 栄治 (松下電器産業)
60年	原 晋介 (阪大・工)	2年	赤座 正樹 (ネットワンシステムズ)
61年	大川 剛直 (阪大・情報科学)	3年	上野 隆範 (阪急電鉄)
62年	荒木 範行 (日本エリクソン)	4年	三浦 克介 (阪大・情報科学)
63年	戸出 英樹 (阪大・情報科学)	5年	藤井 彰彦 (阪大・工)
平成元年	堀井 康史 (関西大)	6年	上向井正裕 (阪大・工)
2年	松田 洋一 (NTTスマートコネクト)	7年	上野 弘明 (広島大)
3年	畠 真司 (大阪ガス)	8年	梶井 博武 (阪大・先端科技共同センター)
4年	上田 哲也 (京都工芸繊維大)	9年	野田 研二 (松下電器産業)
5年	安部田貞行 (NTTドコモ)	10年	島田 尚住 (三菱電機)
6年	村上 智己 (三菱電機)	11年	藤澤 猛史 (関西電力)
7年	池田 武弘 (NTTドコモ)	12年	大竹隆太郎 (松下電器産業)
8年	加藤 真 (大阪ガス)	13年	小野 敏明 (キャノン)
9年	菅原 弘人 (日本電気)	14年	三上 真範 (ソニー)
10年	中西 淳平 (阪大・院)	15年	樋渡 伸二 (日産自動車)
11年	門田 行広 (三菱電機)		
12年	新熊 亮一 (京都大)		
13年	東野 武史 (阪大・院)		
14年	村越 昭彦 (阪大・院)		
15年	藤本 正樹 (NTTドコモ)		

(電子工学科・電子工学科目)

昭和37年	長谷川利典
38年	白川 功
39年	尾浦憲治郎 (阪大・工)
40年	吉岡 信夫 (大阪工業大)
41年	鷹岡 昭夫 (阪大・工)
42年	打田 良平 (阪大・工)
43年	春名 正光 (阪大・医)
44年	藤原 秀雄 (奈良先端科技院大)

(情報システム工学科・情報システム工学科目)

平成5年	一階 良知 (阪大・情報科学)
6年	安部 敬一 (日本アイ・ビー・エム)
7年	原 隆浩 (阪大・情報科学)
8年	池内 智哉 (三菱電機)
9年	相坂 一樹 (ソニー)
10年	密山 幸男 (阪大・情報科学)
11年	中尾 太郎 (阪大・院)
12年	工藤 祐介 (ソニー)
13年	兼田 佳和 (日立製作所)
14年	義久 智樹 (京都大学)
15年	庄島 大基 (NTT東日本)

澁電会 会則

会 則

第1条 本会は澁電会と称する。

第2条 本会は事務局を大阪大学大学院工学研究科電気系内に置く。

第3条 本会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う。

第4条 本会の会員はつきのとおりとする。

(1) 正会員

- イ. 大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科ならびにその前身である学校の電気系卒業生。
- ロ. 大阪大学工学部および工学研究科の電気系教官。
- ハ. 大阪大学工学部電気系教官主査のもとで学位を得た者で、本会に入会を希望する者。
- 二. 特に本会に縁故があり、役員会の承認を得た者。

(2) 特別会員

正会員以外で大阪大学工学部電気系の教授、助教授および講師であった者ならびに特にこの会に縁故のある者。

(3) 学生会員

大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科の電気系学生

(4) 賛助会員

本会の活動を援助する法人または個人

第5条 本会に次の役員、委員を置く。

会長1名

副会長、幹事、クラス委員

第6条 会長は総会の議を経て選出する。副会長、幹事については会長が指名し、総会で承認を得る。クラス委員については学科別卒業年度別に選出する。

第7条 会長は本会の会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐する。

第8条 会長、副会長、幹事は役員会を組織し、会務を処理する。クラス委員はクラスを代表し、本会に関する重要事項の相談にあずかる。

第9条 役員会の推薦により、本会に顧問を置くことができる。

第10条 役員の任期は2年とする。ただし、重任はさまたげない。

第11条 定期総会は年1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。定期総会では事業報告、会計報告および役員改選その他の議事を行う。

第12条 本会の事業年度、会計年度は毎年6月1日に始まり、翌年5月31日に終る。

第13条 正会員は別に定めた規定により、会費を毎年7月末日までに納入しなければならない。

第14条 本会は必要に応じて支部を置くことができる。

第15条 本会則の変更は総会の議を経て行う。

細 則

・会費は年額4,000円とする。

(平成7年度より実施)

・大学学部卒業時から50年を経過した会員は、会費の納入を要しない。(平成15年度より実施)

平成16年度 講演会・総会・懇親会



尾浦憲治郎先生 ご講演
「カーボンナノ材料の作製制御とその応用探索に向けて」



吉野勝美先生 ご講演
「21世紀を支える基盤技術」



懇親会のひとこま 乾杯



総会風景

見学会



光量子科学研究中心・科学館前にて

平成16年度 卒業祝賀・謝恩会



会長 祝辞



祝賀・謝恩会のひとこま



楠本賞、工学賞、工学賞次点 受賞者表彰



景品抽選会



餅つき風景



卒業生代表 梅田秀一君 挨拶

編集後記

社会が激動する中、大阪大学も独立法人化後1年が経ちました。学内にいる教職員も戸惑いながら其の変化に一歩一歩対応しているのですから、大学の外にいらっしゃる同窓生の方々には何が起こっているのか検討もつかないのでしょうか。時代とともに変わりゆく様々な母校のニュースを会報澪電で少しでもお伝えできればと思います。また、一方で、どのように時代が変わろうとも大学の使命は教育と研究、そしてそれを通じた社会貢献であると言えます。その活動を元気良く行うためにも、やは

り同窓生の方々からの大学へのご支援、ご協力が不可欠となります。人材の流動性が高まってきた昨今、同窓生同士のコミュニケーションも益々重要になってくるでしょう。本会報が少しでも皆様の交流のお役に立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、玉稿を快くご執筆下さいました方々、ならびに記事の情報収集にご協力下さいました方々に深謝申し上げます。

(編集担当幹事：森勇介、松本正行)

澪電会会費納入のお願い

澪電会の財政状況は、諸般の事情により非常に厳しい状況にあります。本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発にするために、何卒、平成17年度会費（4,000円）の早期納入（できれば6月末日までに）にご協力賜りますようお願いする次第であります。卒業年度の新しい会員各位の納入率が低くなっています。卒業して間もない方々も、是非ご協力のほどお願い申し上げます。

なお、会費納入の便宜を図るため、銀行口座からの会費の自動振込制度およびコンビニエンスストアでの会費納入システム（平成12年10月から導入）も採用しておりますので、是非ご利用ください。また、自動振込の銀行口座を変更ご希望の場合は、澪電会事務局までご一報くだされば、折り返し口座変更手続きに必要な預金口座振替依頼書をご送付いたします。

なお、大学学部卒業時から51年を経過した方の会費は免除になっておりますので、納入の必要はございません。

澪電会会計幹事

発行 潤電会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1
大阪大学大学院工学研究科電気系内
電 話 : 06-6879-7789 (ダイヤルイン)
ファックス : 06-6879-7774
電子メール : reiden@pwr. eng. osaka-u. ac. jp